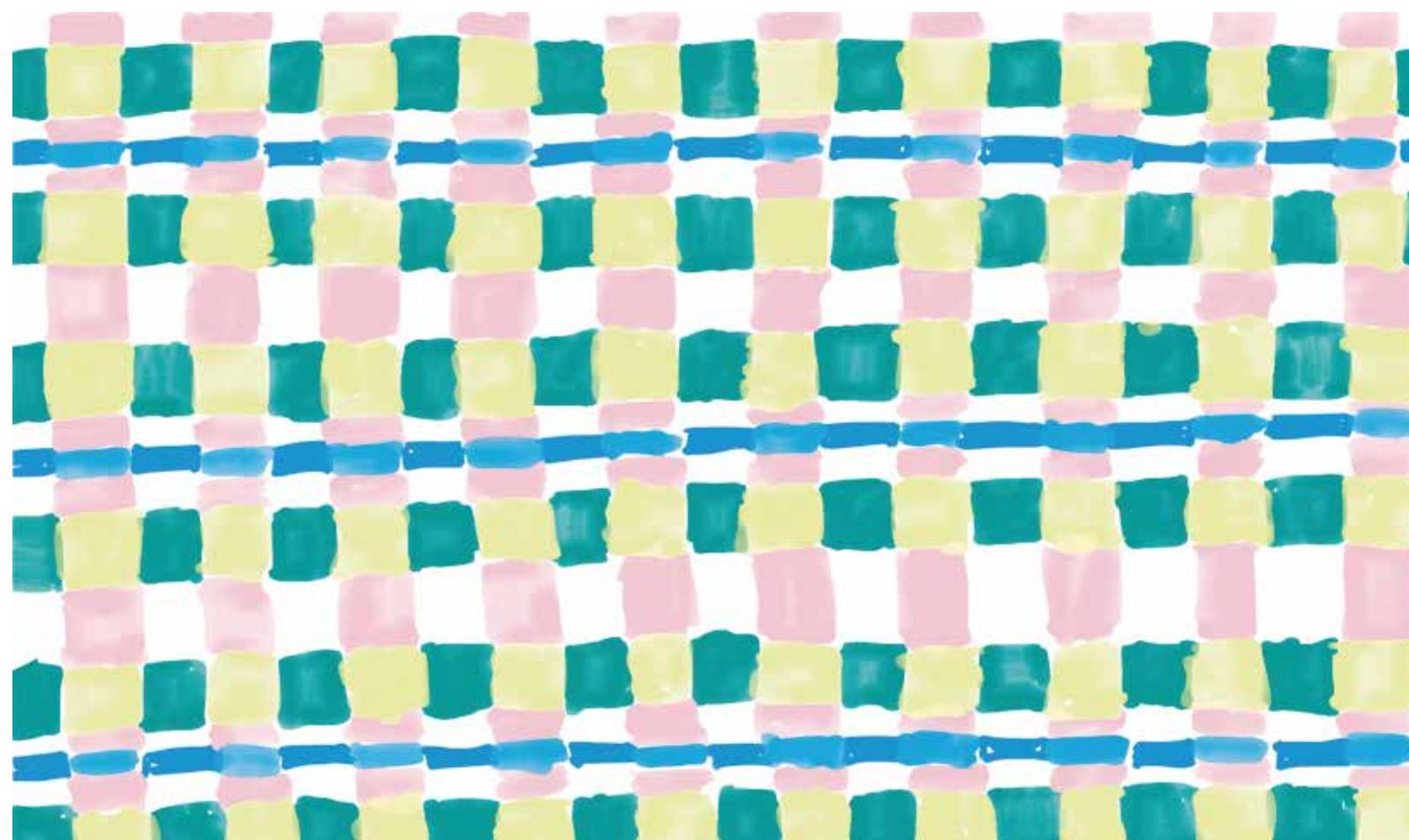


一般社団法人タウンスペース WAKWAK

子どもから高齢者までの切れ目のない支援づくり



はじめに

-ごちゃまぜを創り出す-

本レポートは WAM 助成（社会福祉振興助成事業）を受け、大阪府高槻市富田地区を拠点に実施した「子どもから高齢者までの切れ目のない支援」を生み出そうとする実践の2年間の取り組み報告である。

2年間は本当にあっという間で取り組みがどれほど実ったかというとまだまだ心もとないのが現状である。ただ、2年間を通じて住民が主体となったまちづくりの方向性という次の芽が育ってきた確信がある。

このレポートではそのエッセンスを述べたい。

キーワードは、「多様な参加を促す」、そこで「支える⇔支えられるの一方向的な関係性ではない双方向の関係性をつくる」、最後に「仕掛けをとおして“まぜる”=ごちゃまぜをつくる」である。

当事業では、子ども、子育て層、高齢者、海外留学生、地域住民などそれぞれのカテゴリーを対象とした事業を生み出すことからはじめた。そこにスタッフとして携わっていただいたのは地域住民をはじめ老人会、自治会、近隣の大学生などさまざまなまちづくりの「担い手」である。大切にしたいのが「支える⇔支えられるの一方向的な関係性ではない双方向の関係性をつくること」である。例を挙げるなら、子どもの居場所に参加していた子どもたちが別の場面「わくわく食堂」ではイベントの進行や発表もし参加者へ多くの感動を届けた。ある場面では支えられることもあるが、また、別の場面では主人公としてまちを変える主体者として関わる。そんな双方向の関係性を様々な事業を連動して生み出そうと着想した。

そして、地域の大イベントであるのべ1600人が参加した「盆踊り」や同じく1000人以上が参加した「わくわく食堂」では、それら多様な層の住民をこうした仕掛けをとおして“まぜる”ことで多世代がごちゃまぜに交わる交流拠点を生み出した。

地域には多様な住民が住んでいるが、当然のように何もしなければ交流が生まれることめずらしい。例えば、地域の中に集会所があってもそこに仕掛けがなければ閑古鳥が鳴いたままである。そんな状況は日本各地いたるところで起こっている。

交流が生まれるには仕掛けを生み出し、ハブとなる場（人や組織）が必要である。

タウンスペース WAKWAK はまさにその仕掛けを生み出す場でもある。特徴的なのはいわゆるテーマ型といわれる組織と地縁組織の両方が融合した組織である。テーマ型とは多くの NPO などを例に挙げると高齢者支援、障がい者支援などテーマをもとに支援を行う組織である。その意味で WAKWAK は子どもから高齢者まで多様な層の支援をテーマにした支援をしている。一方で長年の市民運動を行ってきた背景から地縁組織として、ここで紹介する自治会の設立や盆踊りなどの地域イベントの事務局も担っている。つまりそれら両方の機能を担うめずらしい組織体である。

前置きが長くなったが、ここでは2年間の取り組みの様子、それらを生み出す組織がどのようなものか、そのご報告・紹介をしている。このレポートがこれまで当事業をご支援いただいた、たくさんの方々へのご報告となること、この取り組みのひな型が他地域の課題解決の一助になることを切に願っている。当事業にご支援いただいているすべてのみなさまへ感謝申し上げます。

一般社団法人タウンスペース WAKWAK
業務執行理事兼事務局長 岡本工介

もくじ

はじめに - ぢゃまぜを創り出す -	1
一般社団法人タウンスペース WAKWAK	
法人理念・事業一覧	3
WAM 事業概要	5
事業の様子	
子どもの居場所	9
わくわくワールド	13
生活応援・緊急支援	17
高齢者安否確認とニーズ調査	19
富寿栄住宅建替え事業に伴う新自治会の設立	22
わくわく広場	26
富寿栄盆踊り大会復活	28
わくわく食堂を4年ぶりに開催	30
まなびカフェ	32
理論編	34
一般社団法人タウンスペース WAKWAK	
法人理念・事業一覧	52
ひとりぼっちのいないまちをつくる（地域、大学、地元学校園、企業との協働）	54
トピック1 マスメディアでの紹介 NHK 全国放送第1弾・第2弾	58
トピック2 政府広報において放映	60
トピック3 NHK Eテレバリバラに出演	62
トピック4 NHK かんさい熱視線 /NHK 青森あつぷるワイドにて放映	63
トピック5 全国に発信し他地域の課題解決の一助に	64
支援の呼びかけ	68
支えてくださった企業 / 団体 / 個人のみなさま	70
代表理事メッセージ	72
あとがき - 動くというのはそういうこと	73
WAKWAK ができるまで	74

ひとりぼっちのいないまちをつくる

一般社団法人 タウンスペース WAKWAK

ビジョン（めざす社会）

“ひとりぼっちのいないまち”をつくる

ミッション（存在意義）

- ・個人、団体、地域をつなぐハブとなり、出会うまちの“わくわく”を創造する場を創ります。
- ・制度から取り残され、社会から孤立させられている人たちに光をあて、多セクターとの共創により、誰にとっても住みやすいまちを創ります。

アクション（行動・軸）

私たちは「ひとりぼっちのいないまち（社会的包摂）」の実現のため、「ローカリティ（包摂のコミュニティづくり）」と「インターメディアリー（中間支援）」の2つのベクトルで地域と社会に働きかけを行います。

事業一覧

タウンスペース WAKWAK では、「ひとりぼっちのいないまち（社会的包摂）」の実現のため、「富田エリア事業（ローカリティ）」と「中間支援事業（インターメディアリー）」の 2 つの柱で事業を展開しています。

1 富田エリア事業（ローカリティ）



高槻市富田地区を対象エリアに多様な団体のプラットフォームの役割を担いながら子どもから高齢者までを対象とした官民、多セクター連携による「切れ目のない支援」の構築をめざし多岐にわたる事業を行っています。

2 中間支援事業（インターメディアリー）



高槻市域全域を対象に広く多様な団体や人たちの協働によるネットワーク化を通じて、「中間支援」としての活動を行っています。

3 視察受け入れ／講師派遣事業

4 調査・研究開発事業

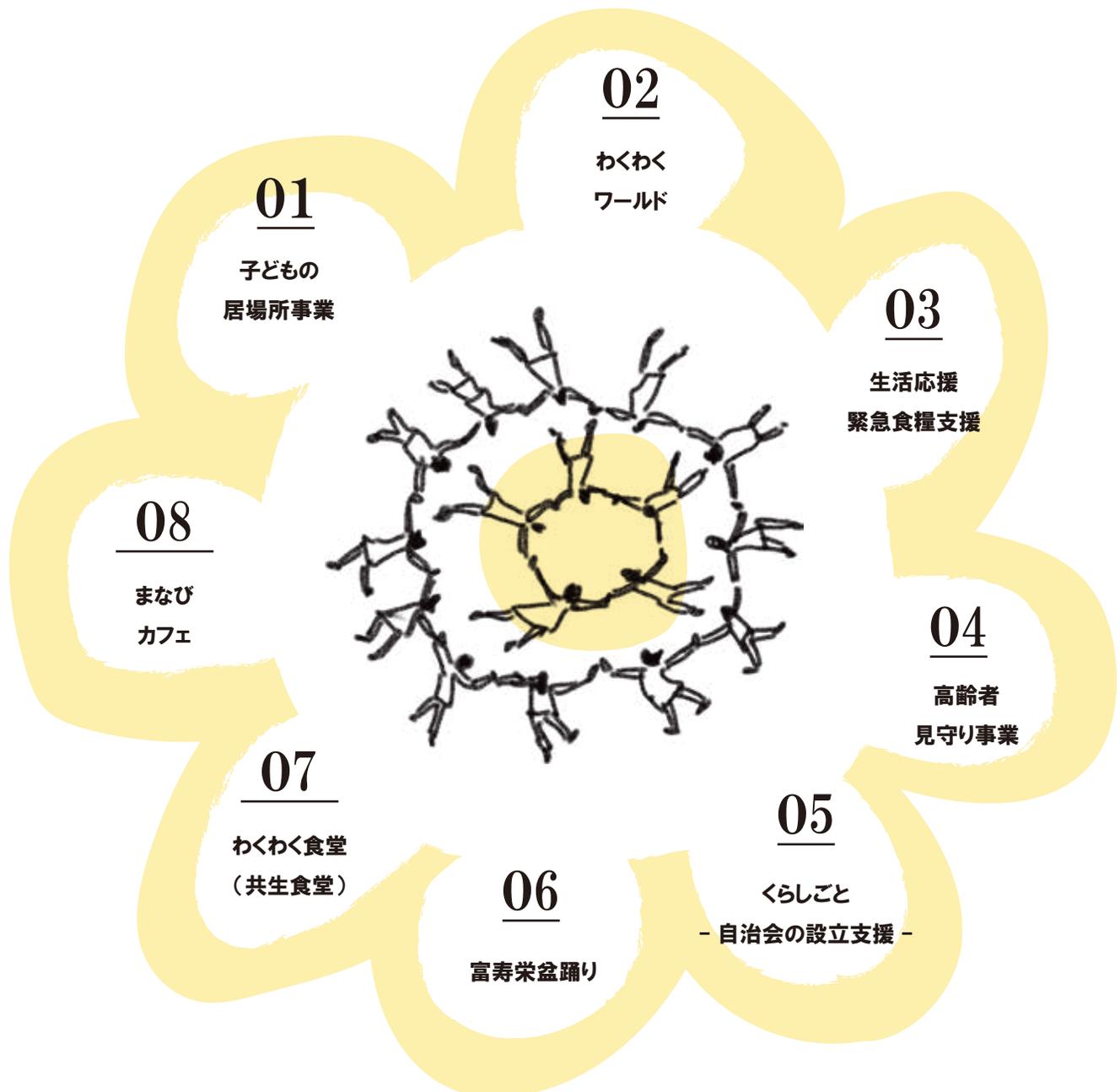
5 その他事業

WAM 事業概要

子どもから高齢者の切れ目ない支援を多セクター共創で生み出す事業

子どもから高齢者までの切れ目ない支援を生み出すことを目的に、地縁組織から大学生までの多様な担い手と協働し既存事業の活性化、新規事業を創設し、子どもから高齢者までの一連の支援を生み出す。また、地縁組織、学校、行政、企業、大学等多セクターによるネットワーク化を行い、多様な分野の支援団体との相互連携や社会的不利を抱える層の包括支援を行うことで、民と民、官と民による誰も取りこぼさない地域を生み出す。また、並行して行政との連携により制度へつなぐことで官民連携の仕組みを創設。これら実践を通じて得られた知見を大学等との協働研究により明らかにし、かつメディアを通じて全国に波及する。

子どもから高齢者の切れ目ない支援を 多セクター共創で"生み出す事業 (WAM助成)



当事業では、WAM 助成（社会福祉振興助成事業）を通じて、子どもから高齢者までを対象とした官民、多セクター連携による「切れ目のない支援」の構築をめざした多岐にわたる事業を行っています。

事業の様子

多セクター共創プロジェクトとしてスタート



2023年6月26日、今年度第1回となる多セクター共創プロジェクト会議を開催。

これは、社会課題が複雑化多様化する中で、地域・家庭・学校・行政・大学・企業等が連携しながら解決を図っていかうと創られたタウンスペース WAKWAK 主催。

今回の会議ではコミュニティスペース NikoNiko を主会場にオンライン（ZOOM）をつないで地域関係団体、校区の小中学校・認定こども園関係者、大学、企業等関係者ら約30名が参加。

冒頭、プロジェクト座長である志水宏吉・大阪大学大学院教授から新しい多文化共生社会について紹介をいただいた後、WAKWAK 岡本工介事務所長兼業務執行理事から昨年度事業報告と合わせ2023年度の富田エリア事業・市域広域事業それぞれの方向性について提起。

富田エリアにおいてはWAM助成（社会福祉振興助成事業）の受託により、新たに「子どもから高齢者への切れ目ない支援事業」を立ち上げ、その仕組みの全国モデル化、市域エリアにおいては「子ども食堂を入口に、市域全域に地域・家庭・学校・行政・大学・企業等の分野を超えたネットワーク化」をめざし、官民・民民それぞれの連携を強化していくことを確認しました。

子どもの居場所がスタート



2023年5/10(水)、コミュニティスペースNikoNikoにおいて、「風の子文庫」主宰の朝日さんや子育て層の方々の力を

お借りし子育て層を対象にした文庫活動、子どもの居場所活動がスタートしました。

午前中には子育て層の保護者の方々が集まる場として、午後には小学生の放課後の居場所として宿題や本やおもちゃと共に過ごす時間を提供するものです。

1日目は盛況で、大人と子ども合わせて22人、幼児、小学生低学年、高学年、大学生、保護者等多世代が時間差で集まり、にぎやかでした。

子どもの居場所活動では、富田地区のオリエンテーションにたまたま来ていた大学生が低学年の宿題をみてくれ、「いつも家ではなかなかダラダラとしているのが、嬉しそうに教えてもらえて」と、お母さんが喜んでおられました。5年生は、自分たちで長机の準備をし、大学生がみている時は宿題をしていましたが、帰ってしまうと、時間もないので早々に切り上げて、なんと絵本を展示している棚から最近ご寄贈頂いた高槻の方の戦争体験の絵本を声を出して読み合っていたのには驚きました。

当事業は年間を通して毎週水曜日に午前は子育て層を対象にした文庫、午後からは子どもの居場所事業として行っています。また、不定期の土曜日には昼食づくりやおやつづくりなども行っています。

子どもの居場所ハロウィン



10月15日(日)は、風の子文庫 × WAKWAK 協働の子どもの居場所、ハロウィンの取組み。毎週水曜日に行っている居場所のイベント版です。

風の子文庫朝日さんが中心となりベテラン保育士さん、文庫の保護者、地域の方々にご協力いただいで実施。



子どもたちは30人、大人は12人の総勢42人。子どもたちが4コースに分かれWAKWAK事務所はじめ富田のまちなかのスポットを練り歩き。

また、12月23日(土)にはクリスマス会も開催しました。

こうした文化に触れる体験はすごく大切でこうした企画をしてくださった関係者のみなさまへ感謝です。ありがとうございました。



子どもの居場所 自然体験活動



2024年6月30日（日）は子どもの居場所特別プログラム「自然体験活動」でした。
日ごろから当法人が大変お世話になっている地元小学校の教員だった毛利先生の別宅@榎田をお借りしてバーベキュー。

午前にはNikoNikoに集合し、子どもたちと一緒に買い出し、その後榎田の山奥へ。

雨が心配でしたが霧雨で涼しいなかバーベキューやへびパン作り、焼きマシュマロなどなど、日常ではできないプログラムを存分に過ごしました。

子どもの居場所プログラムは様々な方々のご協力で運営できています。ありがとうございます。



子どもの居場所 6年生を送る会

風の子文庫朝日さんが中心となりベテラン保育士さん、文庫の保護者、地域の方々の大人 12 人にご協力いただいて実施。それぞれ、カレーライスを作るチーム、オレオカップケーキを作るチーム、遊びを楽しむチームに分かれて活動しました。



3月20日（水・祝日）は、風の子文庫に来てくれていた小学6年生を送る会。

参加人数は、お家の予定の調整などもあり、当日を迎えるまではわからない中で準備。想定を上回る人数の参加でした。



6年生のみなさん、文庫活動を盛り上げてくれて、どうもありがとうございました。
中学生になっても、時々、地域行事の様子を見にきてくださいねー♪



わくわくワールド

2023年6月18日（日）午前11時からコミュニティスペース NikoNiko を会場に WAKWAK の初企画「わくわくワールドー世界旅行をしてみよう」の第1回がスタートしました。



この企画はコミュニティスペース Niko Niko 拠点に海外の留学生と子どもたちが食事を作り交流するという大阪大学の学生からの持ち込み企画による新たな事業です。

第1回参加の留学生はいずれも大阪大学に在籍のベトナム、中国、インド国籍等の大学生のみなさん。

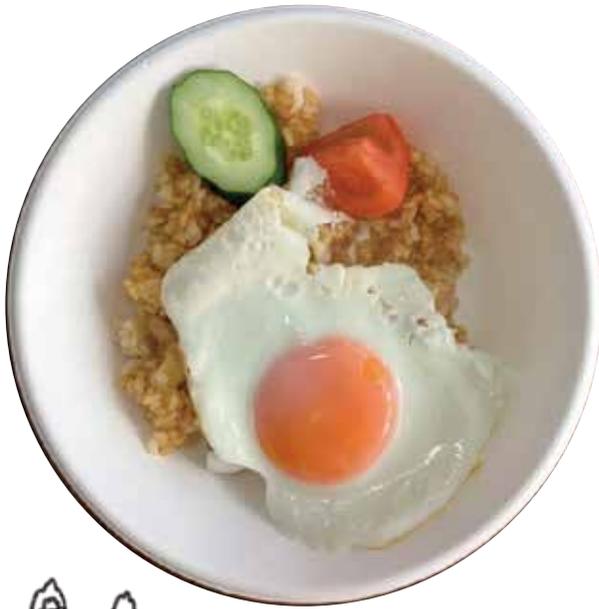
定員15名限定でしたが家族含め総勢30人が参加して、今回のメニューはベトナムの「焼きフォー」づくり。参加した子どもたちは料理作りとゲームに別れ、料理作り班はフォーに入れる人参と小松菜を細かく切ってフライパンでいため、フォーとお肉を入れて最後はオイスターソースと砂糖、ベトナム醤油で作ったたれを混ぜ合わせて「焼きフォー」の完成。

ゲーム班はインドからの留学生に「インドの言葉であるヒンディ語で名前を書く練習」をしてもらったり、中国からの留学生に中国語読みを教えてもらったり。

焼きフォーをお皿に盛り合分けて、みんなで美味しくいただき、ベトナムのお菓子も子どもたちで分け合い、楽しい時間を過ごしました。

わくわくワールド（第2回）

コミュニティスペース NikoNiko を会場に「わくわくワールド」（第2回）を開催。



今回はインドネシア・マレーシア等からの阪大留学生が参加して、インドネシア・マレーシア料理をみんなで作って昼食。インドネシア料理は「ナシゴレン」というインドネシア風チャーハン。



マレーシア料理は「ピサンゴレン」という揚げバナナ。マレーシアでは代表的なお菓子です。



食事の後は、子どもたちと留学生が遊びながら楽しい時間を過ごしました。



わくわくワールド（第3回）

3回目（12月18日）のテーマは「いろんな国のクリスマス」。

インドネシア・ミャンマー・インド・コロンビア・フィジーなどの留学生が多く参加。昼食の料理作りは南太平洋フィジーの伝統料理「ロボ」。本来はバナナの葉っぱ等であるので蒸し焼きにする料理ですが、鍋に鶏肉とタロイモの代わりに里芋を入れて料理。味付けは塩コショウだけでいたってシンプルです。



3回目となり子どもたちと留学生たちの顔もつながりはじめ、さまざまな交流が生まれ始めました。



わくわくワールド（第4回）



2月10日は、コミュニティスペース Niko Niko を会場に今年度最後となる「わくわくワールドVOL4」を開催。

今回はスタッフ、子どもたち含め 23 人が参加し「世界を冒険に出よう」をテーマに「世界のなぞなぞ」や「ゲーム」、そして料理作りを楽しみました。

ミャンマー油そばとデザートのお餅は子どもたちにも好評でお代わり続出。みんなで楽しい時間を過ごしました。



生活応援・緊急支援スタート



2023年5月28日（日）、3年に及ぶコロナ禍に加え相次ぐ物価高騰で家計が厳しくなっていることから、これまでのフードパントリーを拡大して富田富寿栄住宅入居者を対象に「生活応援・緊急食料支援」を実施しました。

主催したのは富田まち・くらしづくりネットワーク、富田富寿栄連合自治会。同老人会、富田支部、WAKWAK、社福つながりで構成された実行委員会。ボランティアスタッフは9時に会場の富田富寿栄西公園に集合し、提供食料の仕分け作業等の準備。

認定NPO法人ふーどばんく OSAKAからはレトルト食品、お菓子、飲料等126ケースの提供をいただき、イオンフードスタイル（旧ダイエー）摂津富田店で回収させていただいたフードドライブ食料品をそれぞれに仕分けをしました。

10時開始前から提供を希望する住民の方が参集し、37名の方に食料を配布。毎月継続して食糧支援を必要とする方の受付には27世帯の方が新たに登録されました。今日の配布食料重量は55,5KG。

今回の「生活応援・緊急食料支援」の目的は食料配布にとどまらず、要支援者への顔の見える支援体制の構築です。



生活応援・緊急支援スタート（第4回）



11月28日（火）午後1時半から富田富寿栄住宅入居者を対象とした「物価高騰・生活応援緊急食糧支援」を実施しました。

今年の2月から開始し5月、7月に続いて4回目の開催です。

主催は富田まち・くらしづくりネットワーク、富田支部、A棟自治会を含む地元連合自治会、老人会、WAKWAK、社福つながり等各実行委員。

今回の配布会場は富寿栄住宅A棟エントランスで、生活相談も同時に開催しました。

配布食糧は認定NPO法人ふーどばんく OSAKA からアルファ米、日清カップ麺、味覚糖お菓子、バウムクーヘン、飲料など41ケースの寄贈をいただきました。



加えて WAKWAK に寄贈されたお米 90kg 含め、一世帯当たり米 2 kg、食糧品 1,5kg、生活日用品 1kg など合わせて 4.5Kg 分。

配布希望登録 46 世帯＋新規登録 9 世帯の計 55 世帯のみなさんに合計 247.5Kg を配布させていただきました。

引き続き顔の見える切れ目のない支援の継続を図ります。

高齢者安否確認とニーズ調査

9月18日の敬老の日にあわせて、地元の富田富寿栄老人会とWAKWAKとで高齢者の安否確認とニーズ調査を実施。



今回はコミュニティスペース NikoNiko を会場に 18日と 19日の 2日間、約 70名の高齢者を対象に安否確認もかねて粗品（トイレットペーパー）を配布。老人会の役員さんが主体となって来られた会員さんにお茶やコーヒーを提供。「困ったときに相談できる場所や社会とのつながり（外出機会）、交流（ふれあい喫茶）等」についてアンケート調査も実施しました。

そこでは、コロナ禍において交流が激減し、「人と話す機会が欲しい」「交流できる場所がほしい」などの声が見えてきました。

その後、お茶やコーヒーでしばらく歓談。コロナ禍で長く途絶えていた対面での交流機会も復活してきました。

その後、新春交流会などのイベントも復活、役員さんが主体となって様々な取り組みをして頂きました。



高齢者ふれあいきつき①

年度末の3月28日（木）子どもから高齢者までの切れ目のない支援にむけコミュニティスペース NikoNiko を活用してふれあい喫茶試行事業を実施。



対象となる会員は 82 名です。来られなかった会員さんには役員さんが手分けして訪問。喫茶スペースも設置されて老人会役員さんによるコーヒーとお茶の提供も行われました。

来られた会員のみなさんもお互いに顔を合わせて近況や昔話に花が咲き、会場となった NikoNiko は一日和やかな雰囲気になりました。



高齢者ふれあいきっさ②

2024 年度も地元の富田富寿栄老人会が中心となって安否確認と見守りを目的とした高齢者ふれあい喫茶を開催。

今年度は米不足ということもあり、老人会の役員さんが中心となってふれあい喫茶に合わせてお米の配布も行いました。

コーヒー、お茶等を飲みながら、本年 12 月の富寿栄住宅入居移転への準備や不安等についても参加者同士で話が弾んでいました。

この事業もだんだんと定着し一つの事業として位置づいてきました。



富寿栄住宅建替え事業に伴う新自治会の設立①

1962年に最初の棟が建てられた富田富寿栄住宅はすでに60年を超え、地域内には19棟508戸の市営住宅が整備されてきました。当然のことながら、老朽化、浴室未設置、バリアフリーや耐震未対応など多くの課題を抱えてきましたが、2018年6月に高槻を震源とする震度6弱の大阪府北部地震が発生し、富寿栄住宅も大きなダメージを受けました。

発災当日には富寿栄住宅2棟に構造上の亀裂が発生し倒壊の恐れがあることから住民は緊急避難ちいおうきの避難所生活を余儀なくされ、取り壊しが決定されました。



2021年3月に高槻市は「市営富寿栄住宅建替基本計画」を策定。2022年6月から第一期工事としてA棟91戸の建設着工が開始されました。

WAKWAKも「未来にわたり住み続けたいまち」をコンセプトに高槻市と協働しながらこれらの取り組みを支援するとともにハード・ソフト両面にわたるコミュニティ再生事業として事業を推進してきました。



富寿栄住宅建替え事業に伴う新自治会の設立②



2023年9月には富寿栄住宅入居者のうち第一次91戸移転入居が完了。新しく整備されたA棟入居に並行して自治会設立への取り組みを行いました。これまで富寿栄住宅には自治会が整備されている棟はわずかでしたが、建替えを機に住民自治の確立と2年後に続く第二次移転（B・C棟）も見据えてコミュニティ再生へ一歩を踏み出しました。

新自治会は富寿栄住宅A棟自治会として10月14日（土）に設立総会を開催。総会には入居者はじめ50数名が出席。来賓として高槻市からは都市創造部住宅課長、地元の富田富寿栄連合自治会長にご出席いただき、設立経過報告・役員体制・事業報告・予算案いずれも質疑の後承認いただきました。



新自治会では会長・副会長・会計・会計監査に加え、1～9Fの各階に班長を選出、入居者全員の自治会加入を実現しました。また、各階の班長が自治会費の徴収や清掃当番を行うほか、入居者全員から要支援情報も集約し、一人暮らし高齢者や障がい者をはじめ安心見守り体制等の整備を進めています。新自治会事務局はタウンスペース WAKWAK が担い、一部業務を事務受託、自走する仕組みをめざします。

富寿栄住宅 A 棟入居者による大掃除

2024 年 11 月 24 日（日）は昨年 9 月に第一期入居した富寿栄住宅 A 棟入居者による大掃除が行われました。



大掃除は昨年に続いて今年で 2 回目。新しくできた A 棟自治会主催で 1～9F の廊下・階段部分、エレベーター、1F エントラス等の共用部分、外構外回りの除草等を実施。

清掃が終わってから各階ごとに集まって次年度の班長選出についても協議されました。

来年 2025 年末には B・C 棟が完成、再来年 1 月には第二期入居が完了して、現富寿栄住宅入居者の全移転が完了予定で、新住宅移転に伴う自治活動のモデルとなるよう A 棟自治会三役、各階選

出の班長さんには本当に頑張っていていただいています。

タウンスペース WAKWAK も自治会活動をサポート、様々な事業を共に担わせていただいています。



富寿栄住宅新春交流会

2025年1月11日(土) 富田富寿栄住宅建替事業での第一期入居移転(2023年9月)以後、初めてとなる富寿栄住宅新春交流会を開催。



中川善太さん親子による「善太鼓」演奏でのオープニングの後、建替えを機に一昨年10月に結成された富寿栄住宅A棟自治会の活動報告を受け、すでに一期入居のA棟住民と今年12月二期入居が予定されている既存棟住民それぞれグループに分かれて新住居移転に伴う経験談等を交流。
 ☑高槻市からは都市創造部住宅課長もご参加いただきました。

ビンゴゲームのお楽しみ会の後、地元の天光軒新月さんをゲストにお迎えし、富田に伝わる萬歳・浪曲・音頭等芸能の歴史の紹介と「葛の葉白狐伝」の音頭を披露いただきました。

市の建替え事業と並行して住民主体の新しいコミュニティ再生へ取り組みが着実に進んでいます。



わくわく広場 実践編①「児童養護施設プログラム」

2024年3月3日（日）はわくわく広場の実践編①として学生さんが主体となって児童養護施設を対象とした体験活動を開催しました。

当日は児童養護施設のグラウンドをお借りし、年長から小学3年生を対象に前半は大学生スタッフが考えた、手形ペイントプログラムや運動系プログラムを子どもたちが選んで遊び、後半はみんなでどろんこ遊びをしておやつに焼き芋をする内容となりました。

前日まで寒かったのですが、この日は暖かさを感じられた気温で思いっきり遊ぶにはもってこいの天気でした。



このプログラムでは子どもたちが思いっきり遊び、その遊びにスタッフがとことん付き合うことで、人に甘えを受け止められる安心感を体験してもらうことを大切にしています。

当日は準備をしている時から、子どもたちがとても楽しみにしてくれているようで「今日なにするん?」「準備手伝うで」などと声をかけてくれました。

遊びがスタートすると、子どもたちは自分で選んだ遊びをおもいっきり楽しんでいる様子が見られて、途中で「こっちもしたい」と声上がり、最終的には全員が全てのプログラムに参加してくれてあっという間に時間が過ぎていました。帰り際には、参加できなかった子どもたちから「高学年のプログラムもやってよ」とリクエストがあり、次年度以降、考えていきたいという宿題となりました。

施設の職員の皆様、関係者の皆様、スタッフとして関わってくださったメンバー、どうもありがとうございました。



わくわく広場 実践編②「子どもたちの集団遊びプログラム」

3/13（木）子どもの居場所の活動として、集団遊びプログラム「みんな遊び『わ』」を開催しました。コミュニティスペース NikoNiko にて毎週木曜日に開催されている子どもの居場所事業。

居場所を利用してきている小学生の子どもたちを対象に、大学生が集団遊びのプログラムを企画・実施しました。



コミュニティスペース NikoNiko の近くに位置する富寿栄公園（通称：三角公園）にて、フラフープくぐり、ドッジボール、手繋ぎ鬼ごっこをしました。10 数名の子どもたちと、大学生サポーター3名に参加していただき、とても賑やかなプログラムとなりました。



公園で遊んでいると、飛び入りで参加してくれる子どもたちもいました。参加した子どもたちからは、「また参加したい！」「もう1回ドッジボールしたい～」などの声を聞くことができました。このプログラムでは、学年の垣根を超えて友達とつながることの楽しさや、つながりの「輪」を大切にしたいとの思いから、「つながり」をキーワードとした遊びを実施しました。



短い時間でしたが、みんなで体を動かして、たくさん笑って、温かい時間を共有することができました。また、この取り組みは3月末まで行っていきます。

NikoNiko で開催されている子どもの居場所から、これからも素敵な「わ」が広がることを願っています。

富寿栄盆踊り大会復活

「富田の盆踊り」として親しまれてきた江州音頭を「コミュニティ再生とまちづくり」として復活したのが2010年。

WAKWAKをはじめ富田地域の自治会・関係団体等が参画する「富田まち・くらしづくりネットワーク」を中心とする実行委員会によって2019年の第10回開催後、新型コロナ禍での3年間の中止をへて4年ぶりに待ちに待った「富田富寿栄盆踊り大会」が開催。



9月2日当日は朝9時から会場となる富田富寿栄公園で昨日に続いて会場設営。午後5時半から毎回、この祭りに出演いただいている「つるちゃん」こと塩崎おとぎ紙芝居博物館会員鶴谷光子さんによる「昔なつかしい街頭紙芝居」で子どもイベントがスタート。会場には5時前から親子連れが来場しはじめ開始5時半には各出店ブースに長蛇の列ができ大賑わい。街頭紙芝居にも就学前の小さな子どもたち、小学生らがつるちゃんの軽妙な語り口にすっかりとりこに。



主催者・ご来賓あいさつが始まる6時半には会場内もびっしりの人出で最高潮に。濱田高槻市長、笹内市議会議員、辻元参議院議員はじめ各級議員のご挨拶と紹介をうけて、いよいよ地元出身の天光軒新月ご一行による江州音頭がスタートしました。4年ぶりの開催となった祭りには前回は大きく上回るのべ1,600人のみなさんにご来場いただきました。ご来場者の自転車整理と誘導等警備スタッフもうれしい悲鳴。音頭の大太鼓を打つのは地元の富田富寿栄老人会有志のみなさん。生の太鼓と音頭がこの祭りの自慢です。お越しいただいたみなさまに感謝申し上げます。

わくわく食堂を4年ぶり開催

2020年2月に開催準備直前に中止となった「わくわく富田子ども食堂」を4年ぶりに復活。地域に住む子どもからお年寄りの方までがごちゃごちゃに交わる交流の場所で誰でも参加できる共生型食堂です。いわば、子どもから高齢者までのそれぞれの取り組みをつなぐ集大成。6回目の開催となる今回も地域・家庭・学校・



行政・大学・企業との連携による多セクター共創、そして子どもが主役となり多くのボランティアによって創り上げる子ども食堂として実施。

クラシックライブや様々な文化体験を通して「地域に“つながり”の橋をかける」がテーマです。

今日は午前9時にボランティア従事者・スタッフが集合してミーティングと会場設営準備。

11時から富田ふれあい文化センター大ホールを会場にオープニングイベント。

主催者代表挨拶の後、来賓を代表して濱田剛史市長からご挨拶を受け、「100万人のクラシックライブ」と富田小・赤大路小6年有志による「わたしからはじまるPeace Action」からスタートしました。

「100万人のクラシックライブ」は音楽を通じて人のつながりを届けようと今回は阪急阪神HD（株）および阪急阪神未来のゆめ・まちプロジェクトの協賛により実現。

吉岡麻梨さんのピアノ、森田真梨恵さんのバイオリンによる演奏の後、富田小・赤大路小6年生有志が「平和」や「だれもが安心できる社会」日ついて発表。最後は生演奏をバックに「ビリーブ」

を手話付きで合唱しました。プログラム2番目

は風の子文庫による「子どもの貧困」をテーマにしたケイト・ミルナー作「きょうはおかねのないひ」（合同出版）の絵本の読み聞かせと富田子ども食堂の歩みの発表。



続いて、「つるちゃんの街頭紙芝居」の公演。軽妙なかけあいに小さな子どもたちも食い入るように見入っていました。



並行して、12時からお隣のサニースポットでカレーライスを提供。前日からボランティアスタッフのみなさんが仕込みをさせていただいて、大人300円・子ども100円で予定の300食をすべて提供。



午後からは乳幼児向けの「よちよちコーナー」で元保育所スタッフさんたちによるわらべ歌やお話し会。



「ふれあい遊びコーナー」では富田小・赤大路小6年生有志によるペットボトルボーリング、工作、魚釣りゲーム、「わくわくワールド」では大阪大学留学生等による世界地図輪投げなど盛りだくさんのコーナーで盛況でした。

ホール前では「地域に広がる第三の居場所ア

クションネットワーク」の活動もパネル展示。午後3時に閉会しました。

今回のわくわく子ども食堂では富田小・赤大路小6年生の子どもたちが参加者受付やオープニング舞台司会、遊びコーナーも担当していただき大活躍。延べ来場者数は945名、ボランティアスタッフ従事者195名で総数1,140名の参加となりました。



まなびカフェ①—富田物語

コミュニティスペース NikoNiko を拠点にさまざまな社会課題についての学びを多様な人たちとゆるやかに学んでいく企画「まなびカフェ」

7月夏休みを利用し、富田地域に関わる教育保育関係者、ボランティアスタッフ等を対象に富田地域のことをもっと知り理解してもらい取り組みとして「富田物語—わたしものがたりと出会う」を開催「教員の働き方改革」等で平日夜の開催が難しくなったため、夏休み期間の26日（水）午前中に開催。新しく富田地域関連施設に赴任された方ふくめ約50人が現地コミュニティスペース NikoNiko と学校施設等をオンラインでつないで実施。

前半は「地域で培ってきた保育・教育 つながりをつりかえる」をテーマに岡井寿美代副代表理事が講演。後半は「マイノリティ発の実践を日本全国のフロントランナーに」と題して岡本工介業務執行理事兼事務局長が講演。

「富田ものがたり」の副題「わたしものがたりと出会う」には、知識だけではなく我が事として課題と出会ってもらい意味が込められています。



まなびカフェ②ーヨガで体と心のコントロールを学ぶ

3月14日（木）には訪問事業に携わる方々を中心に子育て層を対象にヨガの講座を行いました。顔や身体の動きについて、簡単にレクチャーを聞いたあと、実際に動かして効果の変化を試してみました。



顔の筋肉である表情筋を鍛えることで、顔の豊かな表情を作り出すことができます。訪問事業では保護者の人に対する表情は本当に大切です。はつらつとした笑顔でお話を聞いてもらえるよう、皆さん真剣に表情筋を動かしていました。次に体を動かし、自分はどこまでなら動かせるのか、これ以上動かすと痛いのでここまででやめておこう…など、これが体との対話なのだと感じました。また、どちらにおいても大切なのが呼吸でした。

みまもりの訪問、ひいては人間関係でも同じことが言えるのではないかと感じました。

実際に訪問でお話をしていく上で、保護者さんに対して焦らずゆっくりと気持ちを落ち着けてお話しすることで、保護者さんも心を開けやすくなる。出来るだけ色々な話を聞きたいと焦る気持ちを落ち着けて、ゆっくりと話をすることが子育てに焦る保護者さんの気持ちを解きほぐす近道なのではないかと思いました。講師のTomomi先生、ありがとうございました。

そのほかにもメディアリテラシー連続講座の開催など、多様な層に対してまなびカフェを開催しました。



理論編

実践報告

子どもから高齢者の切れ目のない支援の創出のためのアクションリサーチ —大阪府高槻市富田地区における取組から—

関西大学人権問題研究室 委嘱研究員
(タウンスペース WAKWAK 業務執行理事兼事務局長)
岡本 工介

ここでは、当実践のプロセスについて、事務局長である岡本工介が関西大学人権問題研究室「紀要」に投稿した論文を掲載、紹介します。

○キーワード 地域共生型社会、ごちゃまぜ、地縁型コミュニティ・テーマ型コミュニティ、社会的包摂

1 はじめに

2016年、厚生労働省においては高齢化の中で人口減少が進行し、人口減による担い手の不足や、血縁、地縁、社縁といったつながりが弱まっている現状、福祉ニーズの多様化・複雑化を踏まえ、人と人、人と社会がつながり支え合う取組が生まれやすいような環境を整える新たなアプローチが求められていることを背景として「地域共生社会」の実現を掲げた。「地域共生社会」の実現では、制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会の実現を謳った。

続く2021年には地域共生社会の実現を目指すための体制整備事業として、「属性を問わない相談支援」「参加支援」「地域づくりに向けた支援」を一体的に実施する新たな事業「重層的支援体制整備事業」を創設した。そして、社会福祉法第106条においてそれぞれ①「包括的相談支援事業」（属性や世代を問わず包括的に相談を受け止める・支援機関のネットワークで対応する・複雑化・複合化した課題については適切に多機関協働事業につなぐ）、②「参加支援事業」（社会とのつながりを作るための支援を行う・利用者の

ニーズを踏まえた丁寧なマッチングやメニューをつくる・本人への定着支援と受け入れ先の支援を行う）、③「地域づくり事業」（世代や属性を超えて交流できる場や居場所を整備する・交流・参加・学びの機会を生み出すために個別の活動や人をコーディネートする・地域のプラットフォームの形成や地域における活動の活性化を図る）、④「アウトリーチ等を通じた継続的支援事業」（支援が届いていない人に支援を届ける・会議や関係機関とのネットワークの中から潜在的な相談者を見付ける・本人との信頼関係の構築に向けた支援に力点を置く）、⑤「多機関協働事業」（市町村全体で包括的な相談支援体制を構築する・重層的支援体制整備事業の中核を担う役割を果たす支援関係機関の役割分担を図る）の5つの事業を一体的に実施する事業を創設した。

このような画期的な考えに期待が高まるものの日本学術会議社会学委員会福祉学分会「社会的つながりが弱い人への支援のあり方について」によれば、「厚生労働省「地域共生社会」実現本部は対象者の属性ごとの縦割りの弊害を指摘、分野を問わない包括的な相談支援体制の実現を提唱しているが多くの法律・制度・事業は分野ごとの縦割りのままである」と指摘されている。また、同じく「地域共生社会」の実現では地域住民や地域の多様なアクターが地域の諸課題を「我がごと」として解決に向けて主体的に参画していくことが求められているものの全国において地域の諸活動の「担い手」の高齢化や不足、活動の次世代継承の困難さが大きな課題となっている。

筆者はこれまで、これら地域における課題を実践的に解決しようとする被差別部落における社会的企業の萌芽に着目しまとめてきた（岡本 2020, 2021a, 2021b, 2022, 2023a, 2023b, 2024 ほか）。それらはいずれも被差別部落において長年行われてきたまちづくりや教育の実践を再評価し、現在の社会課題の解決にいかによれば汎用できるのかを実践と研究の往還を通じて探ってきたものである。

。

これらを踏まえ、本稿では「地域共生社会」の実現において理念として謳われている「制度・分野ごとの『縦割り』や「支え手」「受け手」という関係を超越して、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えてつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会」の実現に対し、現場においてどのような実践が必要とされているのか、また、実践を通じて得られる知見にはどのようなものがあるのか、それらを被差別部落を有する大阪府高槻市富田地区を拠点に活動する社会的企業である一般社団法人タウンスペースWAKWAK（以下WAKWAK）の実践の一つである「子どもから高齢者の切れ目のない支援を生み出す事業」に着目し、実践と研究の往還、つまりアクションリサーチを通して明らかにする。

ここでいう「社会的包摂」とは、岩田（2008）による「排除されやすい立場にある人々を見過すことなく、社会の中へ包摂する考え方」のことであり、「包摂型のまちづくり」とは、平成12年に「厚生省・社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会」が『社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会報告書』で示した以下の考えをめざしたまちづくりとし、それらの活動を通して生成されたコミュニティを「包摂型コミュニティ」とする。今日的な『つながり』の再構築を図り、全ての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合う（ソーシャル・インクルージョン）また「社会的企業」については経済産業省（2008）「ソーシャルビジネス研究会」により以下のように定義されており、組織形態は株式会社・NPO法人・中間法人など、多様なスタイルが想定されるとしている。

- （1）社会性：現在解決が求められる社会的課題に取り組むことを事業活動のミッションとすること。
 - （2）事業性：（1）のミッションをビジネスの形に表し、継続的に事業活動を進めていくこと。
 - （3）革新性：新しい社会的商品・サービスやそれを提供するための仕組みを開発したり、活用したりすること。また、その活動が社会に広がることを通して、新しい社会的価値を創出すること
- （経済産業省 2008: 3）

本稿におけるアクションリサーチの位置づけについては、岡本（2023c）『タウンスペースWAKWAKにおけるアクションリサーチの位置づけ』を援用する。また、本稿における取り組みは、筆者自身が一般社団法人タウンスペースWAKWAK 業務執行理事兼事務局長としてこの実践に関わってきたため、筆者自身の活動紹介という側面も併せ持つ。

2 富田地区概要および組織の概要

2 - 1 富田地区概要

高槻市富田地区は大阪府北部、高槻市域西部に位置し、約750世帯の被差別部落を含み、長年にわたる部落解放運動の歴史が存在する地域である。古くから寺内町として栄えてきた側面と508戸の公営住宅を有していることから生活困窮世帯やひとり親家庭・高齢世帯等、多くの社会的課題を抱えた側面がある地域でもある。

一方で長年の部落解放運動の成果により地域・家庭・学校・行政等が長年にわたって連携しながら社会的弱者を支えてきた伝統をもつ地域でもあり、そのことから多様な社会資源のネットワークをもっていることも特徴である。

2 - 2 タウンスペース WAKWAK 組織概要及びこれまでの経過

先に述べたように富田地区には長年にわたる部落解放運動の歴史がある。その社会運動の歴史や保育・教育・まちづくりの取り組み、タウンスペースWAKWAKの概要や2023年度までの組織変革や実践については、拙著『ひとりぼっちのいない町をつくる一貧困・教育格差に取り組む大阪・高槻富田からの実践に学ぶ』(明石書店)にゆずり、ここではポイントのみ観視したい。

WAKWAKは、2012年の設立当初より「ひとりぼっちのいない町をつくる（社会的包摂の実現）」に向け実践を重ねてきた。組織の転換期は「立ち上げ期」、「変革期」、「発展期」の3期に分けられる。その中で、従来から行ってきた大阪北部富田エリアを拠点とした「事業体」としての子どもから高齢者までの包摂の仕組みを生み出す事業と、高槻市域全域（人口約35万人）を対象とした「中間支援組織」としての二つの性格をもつに至っている。また、部落解放運動という社会運動性を底流にもつ団体として、その社会運動性をよ

り広げていくためコミュニティ・オーガナイズング¹⁾を取り入れ発展させた。そして、多岐にわたる事業を行うことに並行して、「社会運動」としての動きも同時に行うことを通して、民と民、官と民による協働を生み出し、まちに住む様々な社会的弱者を包摂するコミュニティの生成を試行してきた。それらの実践を踏まえて次の章で紹介する「子どもから高齢者の切れ目のない支援を生み出す事業」を着想、実行することとなった。

3 子どもから高齢者の切れ目のない支援を生み出す事業

3-1 次の「実行」へ向けた現状の把握と分析

先に本稿におけるアクションリサーチは岡本（2023c）『タウンスペース WAKWAK におけるアクションリサーチの位置づけ』とすると述べた。したがって、アクションリサーチのスタイルは、『現状の把握と分析－計画－実行－評価』のステップを踏み、その変化の記録について生成プロセスにもふれながら自己内省的な方法を用い、論じていく。

当然のことながら地域のさまざまな取組は常に動いており、時代も変化することからそれに伴った課題が生まれてくる。また、組織自体もそれまでの実践を通じて組織マネジメントのあり方や組織体の活かし方、実践のあり方などを学習する。

とりわけ高槻市富田地区においては高槻市長の3期目の重点課題として掲げられた「富田地区まちづくり基本構想」が策定され、地区にある市営住宅の全面建て替えをはじめ新たな公共施設の再構築、それに伴う余剰地の活用の検討が始まっていた。つまり、地区にある市営住宅、公共施設などのハード面がこれからの10年で大きく変わることが決まっていた。したがって、近未来を見据えそれらハード面が整備されたのちに必要となるであろうソフト面（子どもから高齢者までを支える仕組みと担い手の発掘、自走の仕組み）を今から生み出していく必要があった。その問題意識のもと当事業を生み出した。そして、当事業では①社会的企業としての即応性・柔軟性を活かす、②新型コロナ禍により拡大した孤独・孤立の課題に対する「つながりの創出」、③地縁型コミュニティ・テーマ型コミュニティの融合、④既存団体等の活性化とテーマ型コミュニティの仕掛けづくりに主に着目して実践を創出した。

①「社会的企業としての即応性・柔軟性を活かす」

社会的企業としての即応性・柔軟性を活かすことは、言い換えれば社会的企業という組織体の強みを最大限に活かすということである。社会的企業の最大の強みは世の中で起こるさまざまな社会課題に対し、即応的、柔軟に対応できることである。弱みは財源や人の確保である。当事業を創出した2023年度は、新型コロナウイルスの感染拡大はようやくおさまりはじめていたものの、相次ぐ物価高騰が重なり、とりわけ社会的不利を抱える層に一層の不利がかかっていた。当然、そこに行政施策も行われはじめていたものの行政施策は税金を扱う、公平性、平等性を重んじるという特性上、施策の実施までには時間がかかる。また、先に述べた「地域共生社会の実現」などが謳われているものの福祉制度・政策はまだ子ども・障がい者・高齢者といった対象者の属性に応じた仕組みを脱しておらず、それら既存制度を活かしながらも地縁組織や多セクターのネットワーク化、包括支援を通じたセーフティネットの構築が求められていた。その状況に対し、これまでWAKWAKは地縁組織としての長年の実績をふまえ、地域に社会資源があっても有機的につながらなければ機能しないことから地縁組織、学校、行政、企業、大学等の多セクターをネットワーク化しつつ各役割を一貫して担ってきた。一方でWAKWAKの課題としても子どもから高齢者の多様な属性に対し支援を行ってきた実績はあるものの、相談支援（コミュニティソーシャルワーク事業）や各種の事業を子どもから高齢者までの切れ目のない支援として再構築し、仕組化する必要性が生まれていた。

② 新型コロナ禍により拡大した孤独・孤立の課題に対する「つながりの創出」

先にも述べたようにこの近年は新型コロナ禍において、社会的不利を抱える子どもから高齢者がより一層の不利を抱えており、それらに物価高などが追い打ちをかけ全属性に孤独・孤立が広がっていた。WAKWAKの事務所は日々、子どもから高齢者までが訪れることから様々な声が聞こえていた。新型コロナ禍により拡大した課題・ニーズとしては、1日1食以下の食事、家庭教育力の差による著しい学力格差、虐待の深刻化、家庭での孤立化、DVの深刻化、保護者の不安感の増大等、社会的不利を抱える子どもや家庭に、日常における困難が更に増幅しており、緊急支援、制度への伴走支援およびアウトリーチによるアプローチが必要となっていた。そこで、2021年度に緊急支援プロジェクト「学び・食・制度への伴走支援」を一体的に実施した（支援数のべ2,665人、担い手発掘89人、制度化1件）。住民（とりわけ高齢者）の支援では、定額給付金や生活保護などの制度への伴走支援を行い、事務所へほぼ毎

日來訪もあった。中には「ここ（事務所）にきていなければ定額給付金の申請をあきらめていた」という声もあり、制度を最も必要としながらもつながっていない住民を目の当たりにしていた。高齢者の中には公的機関の閉鎖や外出の制限により著しい交流機会の激減が起こっており、それらは孤立や孤独、生活リズムの悪化や病気のリスクの増加につながっていた。それらの状況から、切迫した支援が必要な家庭に対しては食材等の配布をはじめとする緊急支援が必要であり、同時に要支援者も含めた住民の誰もが参加できる居場所事業や見守り活動（アウトリーチ）、つまり「つながりの創出」が属性による切れ目なく創設される必要があった。

③ 地縁型コミュニティ・テーマ型コミュニティの融合

日本全国で地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティの関わりが指摘されて久しい。その中において先に述べたように長い歴史の中でこれまで WAKWAK は地域で活動する自治会や老人会、社会福祉法人、民生委員児童委員などの地縁組織、学校、行政、企業、大学等の多様なネットワークを築き、またそれら多セクターをつなぐ役割を一貫して担ってきた。そのことから後ほどの実践で紹介するような自治会の再編、盆踊り大会の事務局などの地縁型コミュニティづくりを住民と協働し担ってきた。他方で、「子どもから高齢者までの包摂のまちをつくる」ことをテーマとして日本各地の NPO に見られるような子どもから高齢者までの属性別の支援を目的としたテーマ型コミュニティづくりも同時に行ってきた。これら地縁型コミュニティづくり、テーマ型コミュニティづくりの両方を一つの事業体として行う組織は全国的に見れば非常にめずらしい事例である。一方でこれは被差別部落においてまちづくりを行う組織の特徴の一つでもあり、とりわけ大阪府下や市内にあるいくつかの被差別部落でも同様の実践がなされている。それら地縁型コミュニティ、テーマ型コミュニティの融合を通して、地域内外の子どもから高齢者までの多様な層が参加、つながりが生まれる実践を着想した。

④ 既存団体等の活性化とテーマ型コミュニティの仕掛けづくり

はじめにでも述べたように、既存の地縁組織である自治会や福祉施策を担う担い手である福祉委員や民生児童委員、保護司などの「担い手」不足や「担い手」の高齢化に伴う祭りやイベント等の維持・継承の困難が叫ばれて久しい。また、従来学校の活動を支えてきた PTA 活動なども PTA 加入者の激減や PTA 役員の担い手の減少にも拍車がかかっている。この状況は富田地区においても例外ではなかった。これらまちの様々な活動における「担い手」の減少は地域の住民自治を低下させ、結果として住民同士の支え合い機能を低下させる。それらに対し、既存団体の担い手の発掘と同時に新たな担い手の発掘の仕組みづくりも必要となっていた。そのことから従来から地域の様々な活動に長年携わってきた市民活動経験者、元行政職員、元学校教員やベテラン保育士、老人会役員などの力を借り、まちの様々な取組のキーマンとしての参画を促進し活動を活性化すること。それに加え、新たな担い手、とりわけ次世代の発掘のしかけとして、イシューやテーマに対して人を集め活性化していくテーマ型コミュニティづくりを着想した。これは長年の社会運動がもたらした「ひとづくり」という財産を活かしつつ、従来からのメンバーにまちの担い手としての出番を生み出すことと同時に、時代に合わせて新たな次世代の担い手を発掘し、かつその両者が協働することで活動や文化を継承するしかけでもある。言い換えれば、従来型の社会運動や既存の活動を維持することは重要であることは言わずもがなではあるが、時代の変化に伴って変化を遂げなければ従来型の視点とアプローチだけに固執してしまい、そこから新たな担い手は集まらず、結果、地域支援が停滞していくという近い将来を見据えてた危機意識からの着想でもある。

3 - 2 計画 (planning)

「次の「実行」へ向けた現状の把握と分析」における社会情勢の捉えやポイントをふまえ、これらの事業を実現化するための財源として独立行政法人福祉医療機構が行う「WAM 助成（社会福祉振興助成事業）」（4,004,000 円〈人件費含む〉）の採択を受けた。当事業の概要は以下の通りである。

子どもから高齢者までの切れ目ない支援を生み出すことを目的に、地縁組織から大学生までの多様な担い手と協働し当法人における既存事業の活性化および新規事業の創設を行う。また、地縁組織、学校、行政、企業、大学等多セクターによるネットワーク化を行い、地域における支援団体との相互連携や社会的不利を抱える層の包括支援を行うことで社会や制度からともすればとりこぼれやすい層も見捨てない子どもから高齢者まで一貫した支援の仕組みを生み出す。その動きに並行して議員へのロビー活動、行政との連携によりその仕組みを制度へとつなぐ。これら実践を通じて得られた知見を大学等との協働研究により明らかにし、他地域へと波及する。

3 - 3 実行 (Action)

先に述べた高槻市の施策によるハード面の整備に合わせ、将来を見据えて2023年度に生み出した実際の事業が以下に列記する事業である。当事業の前段となる大阪北部地震後のコミュニティの再生に向けた取り組みについては、岡本2021a, 2021bを参照されたいが、これらの取り組みの中で富田地区に「つながる・つみこむ・であう」をコンセプトにした場として古民家を改装した「コミュニティスペースNikoNiko」を整備しており、当事業はその場を主な拠点として、子どもから高齢者までの属性別に9つの事業を生み出した。以下ではそれらの事業を紹介し、そこから生み出そうとした機能をまとめる。

(表1 事業概要)

①子どもの居場所づくり 【既存事業の拡充】	
属性	子ども
目的	従来、WAKWAKにおいてケア付き食堂として生活困窮をはじめ福祉的なケアが必要な子どもたちを対象に行ってきた子ども食堂（新型コロナにより休止）を子どもたちの自立の観点から、子どもたちも料理をつくり、食を共にする事業および学習支援へとリニューアルして実施する。
内容	定期的な子ども食堂および学習支援を実施
日時および回数	週1（5月10日開始～3月末）土曜日不定期開催、年48回
場所	古民家を改装したコミュニティスペースNikoNiko
参加者数	延べ人数705人、実人数20人
事業の担い手	風の子文庫・ベテラン保育士・同ボランティア
様子	これまでケア付き食堂として生活困窮をはじめ福祉的なケアが必要な子どもたちを対象に行ってきた子ども食堂（新型コロナにより休止）を子どもたちの自立の観点から、子どもたちも料理をつくり、食を共にする事業および学習支援へとリニューアルして実施。地域のニーズの高さから当初月2の予定を週1に変更し実施、地域の文庫主催者や子育て層のボランティアが中心となり、ハロウィンやクリスマス会、六年生送る会など不定期でさまざまな文化に触れるイベントも開催。当初、月2回、約10人を予定していたが、地域のニーズの高さおよび子育て層のボランティアの確保等ができたことで毎週1回の子どもの居場所の開催となり参加人数も大幅に増えた。およそ20人ほどが定着参加し毎回10～15人前後の参加となった。また、地域・家庭・学校・行政・大学・企業等で構成している多セクター共創プロジェクトにおいて取り組みを共有したことで学校や行政、認定こども園等との連携がスムーズにいき、他機関と連携しながらの運営や包括支援につながった。

②子ども文庫（子育てサークル） 【既存事業の拡充】	
属性	子育て層
目的	地域の子育て層を対象に発達障がいや悩みや子育ての困りごとなどをともに分かち合える居場所を生み出すことで孤立や孤独に陥らないよう専門家が継続的に関わる体制を構築する。

内容	ベテラン保育士や文庫主宰者等の女性が中心となって子育て層を対象に読み聞かせや文庫活動を行う。併せて、子育ての困りごとや悩みごとに対し支援を行う。
日時および回数	週1（5月10日開始～3月末）開催、年45回
場所	古民家を改装したコミュニティスペースNikoNiko
参加者数	①保護者（子育て層）延べ405人、実人数10人 ②就学前の子ども 延べ172人、実人数4人
事業の担い手	風の子文庫・ベテラン保育士・同ボランティア
様子	地域の子育て層を対象に発達障がいのある悩みや子育ての困りごとなどをともに分かち合える場をつくりベテラン保育士や文庫主宰者等の女性が中心となって子育て層を対象に読み聞かせや文庫活動を行った。併せて、子育ての困りごとや悩みごとに対し支援を行った。文庫活動を通して、とりわけお子さんに発達障がいのある子育て層が数多く参加し、日々の悩みを打ち明けられる居場所となった。また、そこで育った子育て層が小学校の本の読み聞かせボランティアなどにもつながり、地域の中で自分がしてもらったことを地域に還していこうとする循環の流れも生まれた。

③高齢者見守り事業 【新規事業】	
属性	高齢者
目的	主に市営住宅の独居高齢者を対象に様々な交流活動を行うことで地域内での孤独化や孤立（孤独死）を防ぎ、生きがいをもって生活できるよう支援する。
内容	地元老人会と協働し、定例の交流会（茶話会）及び季節ごとの交流会、見守り活動（アウトリーチ）を行う。
日時および回数	定例会：毎月1回、12回、交流会：5日
場所	古民家を改装したコミュニティスペースNikoNiko
参加者数	定例会：延べ96人・実人数8人、○交流会延べ204人、実人数70人、見守り：152件
事業の担い手	富寿栄老人会
様子	主に市営住宅の独居高齢者を対象に地域内での孤独化や孤立（孤独死）を防ぎ、生きがいと出番をもって生活できるよう地元老人会と協働し、定例の交流会（茶話会）及び季節ごとの交流会、見守り活動（アウトリーチ）を行った。当初、新型コロナウイルスの感染を気にする高齢者もあったため上半期の活動は老人会と相談の上、少人数で集まる定例会にとどめ、下半期にそれらに留意しながら事業実施を行った。とりわけ高齢者の新型コロナ禍の影響やニーズを把握するためアンケート（困っていることはないか、身の回りに頼れる人がいるか、交流の場が必要などを質問）を実施しニーズ把握を行った。また、見守り活動の一環としてふれあい喫茶や生活用品の配布などを行い、交流会の場に参加できなかった高齢者の自宅へは老人会の役員が中心となって訪問し見守りを行った。

④「わくわく広場」 【新規事業】	
属性	大学生
目的	将来、教員や福祉職等をめざす大学生が主体となって小学生を対象にしたイベントを企画し、実施する中で対人援助職としての実践経験を積み、さまざまな背景を持つ子どもたちに寄り添うためのノウハウを学ぶ。
内容	さまざまな背景を持つ子どもたちに寄り添うためのノウハウを学ぶことを目的に専門家（社会福祉士）による対人援助職の系統的な研修の実施および研修の一環として大学生が主体となって小学生を対象にしたイベントを企画・運営する。
日時および回数	研修2回および実践2回
場所	研修：古民家を改装したコミュニティスペースNikoNiko 実践：市内の児童養護施設（聖ヨハネ学園）および富田町にある公園
参加者数	学生：延べ人数48人・実人数12人 小学生：延べ23人、実人数23人 ※就学前の児童も参加
事業の担い手	近隣の大学
様子	大学生の募集についてはこの数年、多くの人数が集まってきたがこの数年、コロナ禍の影響もあってか、また、授業料を支払うためにアルバイトをしている学生も増え集まりにくくなっているのが現状としてある。今後、大学生をはじめとした若年層をいかに発掘し育成していくかは検討の必要がある。子どもたちへの実践については学生のニーズもあり社会的養護の子どもたちにも関わる実践を追加するなどの工夫を行った。

⑤「わくわくWorld」 【新規事業】	
属性	海外ルーツ
目的	海外留学生との交流を通じて、子ども達が海外ルーツの人に対する理解や交流を促進する。
内容	大阪大学と連携し海外留学生と子どもたちがイベントを通して交流。
日時および回数	年に4回（6/18・10/28・12/18・2/10）
場所	古民家を改装したコミュニティスペースNikoNiko
参加者数	留学生のべ24人・実人数6人、大学生延べ16人・実人数4人 就学前・小学生および保護者のべ72人・実人数18人
事業の担い手	大阪大学学生および留学生

様子	<p>海外留学生との交流を通じて、子ども達が海外ルーツの人に対する理解や交流を促進することを目的に大阪大学と連携し、海外留学生と子どもたちがイベントを通して交流する場をつくった。国籍として、インド、中国、ベトナム、インドネシア、マレーシア、オランダ、フィジー、フランスなど多様な留学生が参加し、また、イベントごとの料理もそれぞれの国にちなんだ料理をつくるなど子どもたちが多様な文化に触れる体験を行った。また、地元の小学校2校とも連携し留学生が総合的な学習の時間に授業を行うなど学校とも連携した文化交流を図ることができた。</p>
----	--

⑥生活応援支援 【新規事業】	
属性	全住民・要支援者
目的	市営住宅における生活困窮家庭等の要支援者を対象に緊急食糧支援を行い、生活応援を行う。また、要支援者のリストアップおよび状況把握を行い支援の継続につなぐ。
内容	食料等の配布と要支援者のリストアップ・状況把握
日時および回数	年6回7日間
場所	富寿栄西公園、富寿栄A棟エントランス、タウンスペースWAKWAK事務所
参加者数	参加人数：のべ632人・実人数55世帯 配布量：616kg
事業の担い手	富田まち・くらしづくりネットワーク、解放同盟富田支部、富寿栄連合自治会、富寿栄老人会、富寿栄住宅入居者委員会、社会福祉法人つながり、タウンスペースWAKWAKの7団体
様子	生活応援物資の配布については地元の自治会や老人会などと連携し実施。とりわけ長期休み等の緊急支援が特に必要な時期に合わせて実施した。場所についても地域の諸団体と協議しながら公園や住宅、熱射病が心配される時期には法人事務所で配布を行うなどの工夫を行った。また、配布の際に住民からの様々な相談を受けつけた。

⑦まなびカフェ 【新規事業】	
属性	全住民
目的	地域住民及び関係者が様々な社会課題についてカフェ形式で学びを深める。
内容	様々な社会課題についてカフェ形式で学ぶ講座の開催
日時および回数	年4回
場所	古民家を改装したコミュニティスペースNikoNiko

参加者数	<p>①7/26 富田小学校・赤大路小学校・第四中学校の教職員</p> <p>②3/14 当法人の事業に携わる子育て層のボランティア</p> <p>③3/25・27 一般（学生・学校関係者・住民まで）</p> <p>合計のべ117人・実人数93人</p>
様子	<p>地域住民及び学校・施設関係者が様々な社会課題について学びや理解を深めることを目的に様々な社会課題についてカフェ形式で学ぶ講座を開催した。教職員対象の場合には働き方改革なども考慮し夏休みの教職員の構内研修に合わせて部落問題をテーマにした講座を実施。子育て層には昼の時間帯、一般向けには日中や昼の時間帯に行うなど各層が参加しやすい時間帯等を設定し実施した。また、内容もテーマによって新規の参加を促すため部落問題をはじめメディアリテラシーやヨガで体と心のコントロールを学ぶなど多様な課題について、体験・講義・ワークショップなど多様な形式で講座を開催した。</p>

⑧ワンストップ相談支援（CSW事業） 【既存事業の拡充】	
属性	全住民・要支援者
目的	子どもから高齢者までの困りごとをワンストップで解決する仕組みを構築する。
内容	従来の当法人におけるワンストップ相談に加え、市営住宅の建替後の移転等により家賃、引越、生活の変化による不安や困りごとに対応するため出張相談会を開催。
日時および回数	①随時実施、②年6回7日間
場所	①タウンスペースWAKWAK事務所、②出張相談会：富寿栄西公園、富寿栄A棟エントランス
相談件数	①284件 ②42件
事業の担い手	富田まち・くらしづくりネットワーク、解放同盟富田支部、富寿栄連合自治会、富寿栄老人会、富寿栄住宅入居者委員会、社会福祉法人つながり、タウンスペースWAKWAKの7団体
様子	<p>子どもから高齢者までの困りごとをワンストップで解決する仕組みを構築することを目的に従来の当法人におけるワンストップ相談に加え、市営住宅の建替後の移転等により家賃、引っ越し、生活の変化による不安や困りごとに対応するため出張相談会を開催。当事業は住宅の建て替えに伴う住民の不安や困りごとを掘り起こし解決することを目的に従来の法人事務所での相談対応、⑥生活応援事業と合わせ、食料配布の際に住民からの様々な相談を受けつけた。9月に建て替えられた住宅A棟には自治会がなかったことから法人として自治会の担い手発掘および設立に携わるなど住民自治の仕組みづくりも行った。A棟自治会の設立総会も行われ役員体制はじめ自治会費や清掃当番を行う班長体制づくりにも携わった。</p>

⑨包括支援ネットワーク構築 【既存事業の拡充】	
属性	全住民・要支援者
目的	地縁組織、学校、行政等のセクターを超えた包括支援体制を地域を基盤に創り出すことで複合的な課題等さまざまな課題をもつ住民を包括的に支援する仕組みを構築する。
内容	当法人がよびかけ、地元の自治会等を中心に構成するまちくらしづくりネットワーク等と連携し、学校、行政等とのネットワークを構築する。
日時および回数	年に3回
場所	コミュニティスペースNikoNikoおよびZOOMによるハイブリッド開催
参加者数	地縁組織（自治会、老人会ほか）、学校（2小学校、1中学校）、認定こども園、大学（大阪大学、平安女学院大学、同志社女子大学）、企業（JATO株式会社）など
様子	地縁組織、学校、行政等のセクターを超えた包括支援体制を地域を基盤に創り出すことで複合的な課題等さまざまな課題をもつ住民を包括的に支援する仕組みを構築することを目的に当法人がよびかけ、地元の自治会等の地縁組織、学校、行政等とのネットワークを構築し、包括支援の仕組みを創った。社会課題が複雑化多様化する昨今の状況を踏まえ従来の地域諸団体・学校・行政の連携の仕組みに大学、企業などの参画を加え分野を超えた多セクターによる課題解決のプロジェクトとして進化させた。ここでは、事業の共有によるセクターを超えた連携の創出や事業評価時に多様な分野、団体、視点からの評価の集約を行うなどの工夫を行いました。

以上の実践を生み出すにあたって3つの機能を生み出そうと着想した。

①「しかけ」をつくる、②参加から参画へ、③「しかけをとおして“まぜる”＝ごちゃまぜをつくる」である。

①しかけをつくる

当事業の立案・実施にあたって生み出そうとした1つ目の機能は多様な層の住民が集まり、かつそこで地域の「担い手」の出番を生み出す「しかけ」をつくるのである。事業立案にあたって、まち全体にある子どもから高齢者までのそれぞれの属性を対象とする社会資源を見渡した。その上で子ども、子育て層、高齢者、海外留学生、地域住民などそれぞれのカテゴリーを対象とした事業で従来から地域において行われている事業の拡充をするもの、新規事業として創出するものを洗い出した。表1の【既存事業の拡充】、【新規事業】がそれぞれである。かつ、それぞれの事業の運営にあたって事業の協力者（「担い手」）となり得る可能性のある団体も併せて洗い出した。「担い手」の発掘と事業実施体制の検討にあたってキーとしたのが従来から携わっているベテラン層の「担い手」と次世代の新たな「担い手」の融合であり、事業実施を通じたベテラン層から次世代へのノウハウの継承である。例としてあげれば（表1）①の子どもの居場所づくり事業には風の子文庫を主宰するベテラン保育士と子育て層の保護者が協力者として携わっているが、それらは居場所の運営を通じた両者の融合とノウハウの継承を意図している。一方で、同じく（表1）⑤の「わくわくWorld」は、大阪大学の学生の持ち込み企画として行った事業である。これは筆者が大

阪大学のゲストティーチャーに招かれWAKWAK事業を紹介したのをきっかけに学生が企画を申し出てくれたものである。ちょうど、地域内において海外ルーツの住民が増えている現状を目の当たりにする中で、交流の必要性を問題意識として捉えてきたことと、学生からの企画が合致したことで実現化した。このように従来からの担い手、新たな担い手の発掘をとおして（表1）のような子どもから高齢者までのそれぞれの属性に合わせた事業を立案し、事業の実施にあたってそれぞれの「担い手」に協力を打診し、事業の実施に至った。

②参加から参画へ

先に紹介した「しかけ」を通して、地域のニーズをとらえながら多様な担い手と連携して様々な事業を生み出したことで当初の予定を大幅に超える参加人数が生まれ多様な層の「参加」が生まれた。また、そこには「参加」のみならずまちの様々な事業に「参画」する新たな担い手も生まれ、これらの事業を継続的に進めていくためのベースも生まれることとなった。例えば、(表1)①の子どもの居場所づくり事業に保護者として参加していた層が運営の手伝いにつながり、地元小学校の読み聞かせ活動への参画なども生まれた。(表1)③の高齢者見守り事業の取り組みにおいては、企画、広報、買い出し、当日の運営までほぼすべてを老人会の役員が中心となって行い、WAKWAK事務局はそのサポートに徹している。実はそれは法人の他事業でのあり方にも一貫している。そのことが生み出すのは、住民1人1人が「自分たちがまちを創っている」という感覚と主体性である。事務局がほぼすべてを担い、そこに利用者は参加だけしてもらうというあり方は過去に経験があるが、それは住民の主体性を失わせお客さんを生み出すこととなる。一方で、ここで例に挙げた老人会のような「参画」をすぐに生み出すことは難しい。なぜなら、これらは長年の老人会独自の活動により生まれた成果でもあるからである。要はしかけをとおして、様々な

参加から参画の段階や場を用意することが必要である。これは法人の規模が設立時の財政規模800万円ほどの頃から3600万円かつ多岐にわたる事業を行うようになった現在も変わらずに大切にしている姿勢であり、まちに根づいた住民主体の取り組みをしていく上で大切なファクターである。

③「仕掛けをとおして“まぜる”=ごちゃまぜをつくる」

3つ目の機能は、当事業と地域の様々な住民が集まる大イベントとの融合を通じた「ごちゃまぜをつくる」である。

富田地区においては、住民が多数集まるイベントとして盆踊り(2023年度はのべ1,600名が参加)や子どもから高齢者までの誰でも参加できる共生食堂「わくわく食堂」(2023年度はのべ1,140名が参加)を行っている。わくわく食堂を例にとると、以下(表2)のような事業である。

(表2 富田わくわく食堂事業概要)

目的	共生食堂をコンセプトに「地域に住む多世代、子どもから高齢者まで多くの人たちがごちゃまぜに交わる交流拠点」として開催する。
今期のテーマ	クラシックライブや様々な文化体験を通して「地域に“つながり”の橋をかける」
日時	2月3日(土) 11時~15時
場所	富田ふれあい文化センターおよび社会福祉法人つながり「サニースポット」
内容①	第6弾となる今期は、阪急阪神ホールディングスグループの支援のもと、一般財団法人100万人のクラシックライブと協働し、地域・家庭・学校・行政・大学・企業など多セクターの協働で実施した。
内容②	<p>①舞台(富田ふれあい文化センター地下大ホール)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開会セレモニー(来賓あいさつ) ・100万人のクラシックライブ×「わたしからはじまるPeace Action」(富田小・赤大路小6年生有志) ・読み聞かせ&富田取り組みスライド(風の子文庫) ・つるちゃんの紙芝居 <p>②各ブース</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よちよちコーナー〈わらべうた、ミニお話会ほか〉(ベテラン保育士) ・ふれあい遊びコーナー〈磁石を使った魚釣り・工作ほか〉(富田小・赤大路小6年生有志) ・わくわくworld〈世界地図輪投げ・オランダのゲーム〉(大阪大学留学生ほか) ・市域広域事業展示 <p>③昼食〈カレーライス〉(元ボランティアグループひまわりほか)</p>

参加者数	総数1,140名（のべ来場者945名、ボランティアスタッフ従事者195名）
協賛品	協賛品:お菓子（神峰寺）・おもちゃ&お菓子（ふーどばんくOsaka）・歯ブラシ（サンスター株式会社）

これまでに紹介してきた「子どもから高齢者までの切れ目のない支援を生み出す事業」を通して、様々な属性別の事業を1年を通して実施してきたことをふまえ、事業の担い手として協力したさまざまな個人や団体が一同に会しかつ協働する場として年度末に「わくわく食堂」を開催した。そこで起こるのが子どもから高齢者まで多様な層の交流「ごちゃまぜ」である。地域には多様な住民が住んでいるが、当然のように何もしなければ交流が生まれることめづらしい。例えば、地域の中に集会所があってもそこに仕掛けがなければ閑古鳥が鳴いたままである。そんな状況は日本各地いたるところで起こっている。

また、この「ごちゃまぜ」の中では「支える⇄支えられるの一方向的関係性ではない双方向の関係性」も生まれた。ここでは、子どもの居場所事業に参加していた子どもたちが「わくわく食堂」においては100万人のクラシックライブとコラボしてイベントの進行や発表もし参加者へ多くの感動を届けた。ある場面では支えられることもあるが、また、別の場面では主人公としてまちを変える主体者として関わる、そんな双方向の関係性も生まれることとなった。

なお、当実践は「3-2 計画 (planning)」の概要で「これら実践を通じて得られた知見を大学等との協働研究により明らかにし、他地域へと波及する。」と述べたが、日本地域福祉学会が創設している第21回「地域福祉優秀実践賞」に採択されたことから日本全国の様々な地域福祉実践に影響を及ぼしていくことが想定される。

4 むすびにかえて

本稿では、大阪府高槻市富田地区を拠点としたWAKWAKによる「子どもから高齢者までの切れ目のない支援を生み出す事業」についてその生成のプロセスを述べてきた。

むすびとして、本稿で明らかになったことおよび「本事業の成果および今後の解決すべき課題」の両面から掘り下げ、かつこれらを通して導き出される実践的インプリケーションと今後に向けての課題を提示しておきたい。

4-1 本稿で明らかになったこと

まず、本稿で明らかになったこととしてWAKWAKという地域に根づいた社会的企業がNPOとしての強みである柔軟性、即応性を活かして従来の制度の枠組みを超えた動きを通して、子どもから高齢者までの切れ目のない支援を生み出すというコンセプトのもと既存事業の活性化および新規事業の開発を行うことで多様な住民が参加できる仕組みを生み出していたことである。また、同時に事業を通じて地域にある社会資源である地縁組織や学校、行政、企業、大学等の多セクターの連携を生み出すことで人がとりこぼれにくい仕組み（包摂の仕組み）を独自に築いていることである。さらに、地縁型コミュニティ・テーマ型コミュニティを融合しながら住民それぞれの属性に合わせた事業のしかけをつくり、かつそこで多様な「担い手」を発掘し、かつ「担い手」が活かされる出番を創り出していることである。

4-2 本事業の成果および今後の解決すべき課題

次に、本事業の評価として、事業の成果および今後の解決すべき課題を挙げる。

「成果」の第1に地域における住民を対象とした既存事業の活性化や新規事業の開発を通して、「社会資源の開発」を行うことで多様な属性の住民が参加できる仕組みを生み出したことである。

第2に地域における既存組織や事業の担い手の仕組みの活性化と新たな担い手を生み出す仕組みを通して、多様な担い手を発掘している点である。これらは地域支援を継続的に行っていくためのベースを生み出した点で重要である。

第3に住民を中心とした「担い手」が主体的に動いていく場を生み出すことをとおして「住民自治の意識の醸成」を図った点である。これは「地域共生型社会」が提唱する住民の主体的な支え合いを育むという理念とも重なる。

第4に事業運営や多様な担い手との協働、地縁組織や学校、行政等関係機関との連携を通して「ネットワーク機能」が強化した点である。これらは、今後多様な住民が困りごとや支援の必要性が生まれた際にネットワークとの連携を通じた支援を充実化させていく可能

性がある。

次に「今後の解決すべき課題」をあげる。

第1に「利用者によるQOLの検証」の必要性である。当事業では高齢者からはアンケート調査をとったもののその他の属性からはアンケートやヒアリングは行っておらず、主に団体側やセクターにかかわる学識者、担い手として携わった個人や団体からの声をもとに評価を行っている。そのことから今後は、利用者によるアンケートやヒアリングを含めQOLの検証が求められる。

第2に「財源」の課題がある。今回の実践のような子どもから高齢者までの多岐にわたる実践を一体的に行おうとする場合、それらを行うための直接事業費はもとより間接経費となる費用は一定の予算規模が必要となる。当事業は先に紹介したWAM助成を通じて可能となったが継続を視野に入れた場合、それら財源の確保は課題である。

第3に「担い手の高齢化」の課題がある。当事業の中心となる「担い手」の多くは65歳以上が主なキーマンとなっている。当事業を通して新たな次世代の担い手の発掘とノウハウの継承を行っているとはいえ人の育ちには時間がかかることから担い手の世代移行を時間をかけて行っていく必要がある。

第4に「文化の継承」の課題がある。富田地域においては長年、地縁組織、学校、行政等が連携することを通して社会的弱者を見捨てないという文化を継承しそれらをもとに連携を継続してきた。一方で学校・行政機関では団塊の世代の退職や数年での異動、働き方改革の導入などにおいて文化の継承が難しくなっている。これらに対し文化の継承のための働きかけもより一層必要となっている。

4-3 実践的インプリケーション

次に「4-1 本稿で明らかになったこと」および「4-2 本事業の成果および今後の解決すべき課題」から導き出される実践的インプリケーションについて他地域への汎用性に重点をおきながら述べる。

地域支援における「ヘッドクォーター」の必要性

まず、地域支援における「ヘッドクォーター」の必要性である。富田地区に1990年代にフィールド調査に入った大阪大学の故池田寛は「教育コミュニティ」（学校と地域が協働して子どもの発達や教育の事を考え、具体的な活動を展開していく仕組みや運動のこと）を提唱した（池田2000）。そして、今後の課題として池田は地域教育推進母体（ヘッドクォーター）の必要性について以下のように述べた。

個々の制度のあいだを調整し、真の意味での「連携」をつくり出すしくみを話し合ったり、計画したり役割の調整をしたり、さらに活動や事業をすすめていくための恒常的な組織が是非とも必要である。これからの地域教育の課題は、地域内のさまざまな人々や組織の連携・連結、つまり協働のシステムをつくり上げることであろう（池田2000:89）。

それらの課題に対しWAKWAKは池田が提唱した地域における教育を推進するヘッドクォーターの考えを引き継ぎ、実践的に発展する中で町づくり全体のヘッドクォーターを担ってきた（志水2024:15）。

そのヘッドクォーターの役割は地域全体や社会情勢を俯瞰的、先見的に捉え地域支援の方向性を方向付け、かつ実践化する役割であり、多種多様な社会的ネットワークをつなぎ包摂型コミュニティを生成する役割である。先に「地域共生社会の実現」が謳われているものの、実際にはまだまだ属性別のままの支援が行われていると指摘したが、地域共生社会の実現を図ろうとするには、コミュニティ単位において地域のありたい姿を地域支援の方向性として描き実現化する動きや既存の枠組みを超え社会資源を有機的につなげていく動きが必要である。富田地区においてはWAKWAKというNPOがその役割の一端を担ってきたが、他地域においては行政機関や社会福祉協議会がそのような動きを担っていくことも可能である。

②地縁型コミュニティ・テーマ型コミュニティをつなぐ「ハブ」の必要性

先に日本全国において地縁型コミュニティとテーマがコミュニティの関わりが薄いことが指摘されていることを述べた。また、WAKWAKの特徴的として地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティが融合した組織であると述べた。そして、テーマ型として多くのNPOなどのように子どもから高齢者まで多様な層の支援をテーマにした支援を行いながらも一方で地縁型コミュニティとして、自治会の設立や盆踊りなどの地域イベントの事務局も担っていることを紹介した。それらの実践知から地縁型コミュニティとテーマ型コミュニティの関わりが薄い要因の一つとして一概には言えないものの、地縁型まちづくりとテーマ型まちづくりのそれぞれがもつ文化の違いがあると考えられる。地縁型まちづくりの特徴として、その言葉通り「地縁」がベースとなる。そのことから地域で生まれ育った縁や移り住んだ縁（仕事であれば赴任した縁）をもとに時間をかけて関係性を築いていく。そのため例を挙げれば、祭りや地域の清掃活動、自治会活動などの地域活動に対しどれだけ参加して住民とともに汗を共に流してきたのかということが信頼を創るベースとなる。一方でテーマ型コミュニティの特徴は「志縁組織」とも言われる。ここでは、志を通して人が集まり、同じような志をもった人たちが組織化し活動を始める

傾向がある。その両者は違った文化を持ち合わせているため協働が進まないこと、時として衝突することが往々にして起こる。しかしながら、地縁組織は住民との長年の関係性から地域における諸課題の発見や住民の「困りごと」をはじめ様々な声を拾い上げていく強みがある。一方でテーマ型コミュニティは、テーマに即した専門的な支援を行える強みがある。この両者が協働することで人がとりこぼれにくい地域となり得る可能性がある。その両者の協働を生み出す際にキーとなるのが「ハブ」となる存在である。菅野（2023）は、東日本大震災の復興現場のネットワーク分析から、災害復興がうまくいく自治体とそうでない自治体の違いは、「ハブ」的な人材を活用できるかにかかっていることを明らかにした。これは災害復興時の知見であるがこれらは地域支援にも言い換えられる。ハブとなる存在（団体）が地縁型コミュニティやテーマ型コミュニティをはじめ学校や行政、大学、企業等のそれぞれのセクターを有機的につないでいくことにより、社会的ネットワークは広がり、それらが有機的につながることで人がとりこぼれにくい地域（包摂型地域コミュニティ）が生成される。これらは日本全国で孤独・孤立の問題や「担い手」の高齢化や人材不足の加速化が起こる中、今後より一層必要となるアプローチと言える。

4 - 4 今後に向けて

最後に今後の実践および研究の課題として以下のことがあげられる。

まず、実践的な課題として「公助と共助の整理」があげられる。当事業は民間の助成金を投入することで富田地区を拠点に社会的企業として即応性、柔軟性を最大限に活かしながら試行的に事業を興してきた。今後は、本来的に行政施策（公助）として行うもの、民間（共助）として行うものを整理して行っていくことが求められる。これら地域自治に対し自走の仕組みを追求する一方でソフト部分に対して行政等からの財源化の追求も必要となる。

次に本研究の限界と今後の課題として、まず本研究で得られた成果のローカリティ色の強さがある。本研究は、被差別部落を含む地区および高槻市富田地区という非常にローカリティ色が強いものである。また、筆者の実践と研究の往還によるアクションリサーチという手法を用いた研究方法からも客観性の視点からより多様な視点からの研究も今後求められる。また、今後の課題として本研究成果の他地域への汎用の模索が求められる。

注

1) コミュニティオーガナイズングとは、藤井（2021）によれば「米国の産業地域財団を創設し、公民権運動にも大きな影響を与えたソウル・アリンスキーを源流とする社会運動の技法であり、多様なアクターとの間で関係性を作り出すことでパワーを高め、社会変革を前進させる方法論である。」とされている。

引用・参考文献

池田寛 2000 『地域の教育改革—学校と協働する教育コミュニティ』 部落解放人権研究所。

岩田正美 2008 『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』 有斐閣。

岡本工介 2020 「コミュニティ・オーガナイズングによる社会変革の共創—高槻富田地区子どもの居場所づくりの取り組み—」 『部落解放研究』 213、部落解放・人権研究所。

岡本工介 2021a 「多セクターとの共創による包摂型地域コミュニティ生成—高槻市富田地区大阪北部地震後のコミュニティ再生の取り組み（1）—」 『関西大学人権問題研究室紀要』 82。

岡本工介 2021b 「多セクターとの共創による包摂型地域コミュニティ生成—高槻市富田地区大阪北部地震後のコミュニティ再生の取り組み（2）—」 『関西大学人権問題研究室紀要』 83。

岡本工介 2022 「新型コロナ禍、支援対象児童等の見守り構築に向けたアクションリサーチ—大阪府高槻市における市域広域事業の取り組みから—」 『関西大学人権問題研究室紀要』 84。

岡本工介 2023a 「地域における居場所の包括連携による全国モデル地域づくりにおけるアクションリサーチ：大阪府高槻市における市域広域事業の取り組みから」 『関西大学人権問題研究室紀要』 85。

岡本工介 2023b 「地域における居場所の包括連携による全国モデル地域づくりにおけるアクションリサーチ：大阪府高槻市における市域広域事業の取り組みから（2）」 『関西大学人権問題研究室紀要』 86。

岡本工介 2024 「地域における居場所の包括連携による全国モデル地域づくりにおけるアクションリサーチ：大阪府高槻市における市域広域事業の取り組みから（3）」 『関西大学人権問題研究室紀要』 87。

岡本工介 2024 『ひとりぼっちのいない町をつくる—貧困・教育格差に取り組む大阪・高槻富田の実践に学ぶ—』 明石書店。

クルト・レヴィン 2017 「アクション・リサーチと少数者の諸問題（1946年）」 『社会的葛藤の解決と社会科学における場の理論—社会的葛藤の解決』 末永俊郎訳、ちとせプレス。

菅野拓 2023 『『やっかいな問題』の解き方としてのネットワーク：災害復興の鍵を握る『ハブ』は何をしているのか』 『スタンフォード・ソーシャルイノベーション・レビュー 日本版 04—コレクティブ・インパクトの新潮流と社会実装』 SSIR Japan

谷川至孝・岩槻知也・幸重忠孝・村井琢哉・鈴木友一郎・岡本工介 2022 『子どもと家庭を包む込む地域づくり—教育と福祉のホリスティックな支援』 晃洋書房。

中村和彦 2008 「アクションリサーチとは何か？」 『人間関係研究』 7、南山大学人間関係研究センター。

日本学術会議社会学委員会社会福祉学学科会 2018 『社会的つながりが弱い人への支援のあり方について—社会福祉学の視点から—』。

藤井敦史 2021 「連帯の技法としてのコミュニティ・オーガナイズング—イースト・ロンドンにおけるコミュニティ開発の現場から—」 『The Nonprofit Review Vol. 20』

Lewin K. 1946. Action research and minority problems: Journal of Social Issue, 2

WEB サイト

経済産業省 2008 「ソーシャルビジネス研究会報告書」

https://www.meti.go.jp/policy/local_economy/sbcb/sbkenkyukai/sbkenkyukaihou_kokusho.pdf (2022/02/01 アクセス)

厚生労働省 「地域共生社会の実現に向けて」

https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_00506.html (2024/06/02 アクセス)

WAKWAK が目指す社会

武庫川女子大学教育総合研究所
所長 志水宏吉



WAKWAKさんの活動を近くで眺めるようになって、数年の月日が経つ。

常に「攻めている」という印象がある。年々事業の規模が拡大していき、新たな事業・取り組み・事業の数が確実に増えている。『子どもから高齢者までの切れ目のない支援づくり』というタイトルをもつ本冊子についても、去年のバージョンより今回の方が、間違いなく質量ともに、より着実したものとなっている。その背景にあるのは、当団体の代表理事・事務局長をはじめとする関係者の皆さんの、「誰ひとりとりこぼさない町をともにつくろう!」という熱い思いである。

かつての日本は、世界に類をみない「平等社会」と言われていた。1970年代から90年代にかけての時期である。その日本で、2000年代以降今日にいたるまで、「格差社会」という言葉が時代を表現する最大のキーワードとなっている。たとえば、私が専門とする、教育・子育ての領域では、数年前から「親ガチャ」社会という言葉がもてはやされている。「親ガチャ」とは、「どういう親のもとに生まれ落ちるかによって、子どもの人生が大きく規定される」事態を指す言葉である。格差社会の進行を放置するなら、社会のネットワークからとりこぼされていく子どもたち、そして大人たちが頻出するようになることは必定である。WAKWAKさんは、敢然とその流れに抗おうとしている。

私の見るかぎり、その活動には3つの特徴がある。

第一に、部落解放運動の精神をコアにしていること。被差別部落に居住する人々に対する差別の克服と彼ら自身のエンパワメントを通じてよりよい社会を形成すること。解放運動によって鍛えられてきたその精神は、脈々と引き継がれている。決してぶれない。

第二に、組織の志のスケールが大きいこと。この冊子のタイトルが、如実にそれを物語っている。「子どもから高齢者まで」、さらには「外国人」や「障害者」もが、その中に取り込まれている包括的な支援の取り組み。「切れ目のない」という語が選ばれているが、要するに「何でもあり」の世界である。

第三に、そこにさまざまなジャンルの人たちがかかわっていること。WAKWAKという組織を中心に、一般市民・企業の人々・行政担当者、そして私たちのような大学関係者などが混然一体となって取り組みのうねりを形づくっている。北摂・高槻という土地柄と民度の高さがその実現に寄与している、と私は見ている。

WAKWAKさんが目指す社会は、「共生社会」と形容することもできる。共生を

現するうえでの最重要ポイントは、いわゆるマジョリティと呼ばれる人たちが

変わることで、私は考えている。今ある社会の形をそのままに、マイノリティ(=社会的弱者)を取り込もうという話では決していない。マイノリティと呼ばれる人たちにも居場所や生きがいがある社会というのは、マジョリティと呼ばれる人たちがそうした社会を素晴らしいものと考え、その実現に向けて自分なりの努力を傾けようとするような社会である。たとえば企業が自らの利潤の増大だけを考えるのではなく、社会貢献の試みを地域の人々と模索しようとする姿勢。今求められているのは、そうした自己変革の試みである。

もちろん、「格差社会」「親ガチャ社会」の構造は、簡単には覆らない。しかし、そうした社会のありようは、さまざまな立場・境遇にある人々の協力や協働の積み重ねによってしか変わっていかない。WAKWAKさんの活動は、その水先案内人の役割を果たすものである。

「切れ目のない支援」とは何か

大阪大学教授
高田 一宏



「切れ目のない支援」。私はこの言葉に少し違和感を抱いている。タウンスペースWAKWAK（以下、WAKWAK）の取り組みは素晴らしいと思うが、この言葉には批判的に向き合わなくてはならないと思うのである。断っておくが、「批判的に」とは、人々がこの言葉をどのように受けとめ、あるいは使っているのかをしっかりと考えるということであって、難癖をつけるとか揚げ足を取るといった意味ではない。

「切れ目のない支援」には、ライフステージのどこかに支援の空白期がある、逆に言えば、それ以外の時期には支援が行われているという含意がある。しかし現実がちがう。支援は切れ目だらけ、いや、「高齢」期に偏っていると言うべきであろう。

老齢年金制度に「現役」や「若者」の世代が不満や不安を募らせるようになってきている。本当に老後を安心して過ごせるほどの年金は受け取れるのか、そもそも制度が維持できるのか。「現役」や「若者」の不満や不安にはそれなりの理由がある。物価は上がるのに実質賃金は上がらない。教育費の負担は非常に重い。勢いどこかに不満をぶつけたくなる。中には高齢者に不満の矛先を向ける人もある。だが、誰もがいつかは老いていくのだから世代間対立を煽るのは不毛でしかない。

「現役」や「若者」の中にも適切な支援へのアクセスを阻まれていた人たちがいる。WAKWAKが行ってきた取り組みのひとつに、未就園児（幼稚園や保育所に通っていない小学校入学前の子ども）のいる家庭へのアウトリーチ活動がある。この事業は、子育てに困難を抱える親の孤立を改めて浮き彫りにした。幼稚園・保育所に子どもが通っていればまだしも、そうでない場合は子どもとその親への支援はとて難しくなるのである。金の切れ目は縁の切れ目だというが、制度の切れ目は支援の切れ目でもある。

少し前には、もっと年齢が高い「現役」世代の「ひきこもり」が大きな社会的関心を集めた（NHKスペシャル取材班『NHKスペシャル ルポ 中高年ひきこもり 親亡き後の現実』宝島社、2021年）。40代・50代の「ひきこもり」の子どもと70代・80代の親が孤立して暮らすことに伴う問題は「4070問題」や「5080問題」とよばれるが、就労の機会を閉ざされたり、病気・障害のために働けなかったりする子どもが親の年金に頼って生活せざるを得ない世帯は少なくないとされる。「ひきこもり」支援が比較的若い層を対象に行われてきたことのツケが今になって出てきたのだ。

「子ども」世代ではどうか。国や自治体は子どもの貧困対策に力を入れるようになってきているが、福祉と教育の制度の垣根はまだまだ高い。社会保障の研究者である広井良典は、教育を「人生前半の社会保障」と捉えるべきだと提言している（広井良典『持続可能な福祉社会 「もうひとつの日本」の構想』筑摩書房、2006年）。一人ひとりの将来の生き方の選択肢を広げるという意味でも、生活上のリスクに「事後」に対応するのではなく「事前」に備えるという意味でも、万人への教育を受ける権利の保障は、生涯にわたる社会保障の課題として、生存権と教育権の統一的保障の課題として考える必要がある。学校教育の関係者はそのことをどれほど意識しているだろうか。

「切れ目のない支援」のためには、各ライフステージにおける課題の連続性と固有性を明らかにし、制度と制度の谷間に落ち込んでいる人の実態を明らかにし、支援のシステム全体を再構築しなくてはならない。考えだすと気が遠くなりそうな感じもするが、WAKWAKにはそういう展望を持って活動を続けてほしいと願っている。

ひとりぼっちのいないまちをつくる

一般社団法人 タウンスペース WAKWAK

ビジョン（めざす社会）

“ひとりぼっちのいないまち”をつくる

ミッション（存在意義）

- ・個人、団体、地域をつなぐハブとなり、出会いやまちの“わくわく”を創造する場を創ります。
- ・制度から取り残され、社会から孤立させられている人たちに光をあて、多セクターとの共創により、誰にとっても住みやすいまちを創ります。

アクション（行動・軸）

私たちは「ひとりぼっちのいないまち（社会的包摂）」の実現のため、「ローカリティ（包摂のコミュニティづくり）」と「インターメディアリー（中間支援）」の2つのベクトルで地域と社会に働きかけを行います。

事業一覧

タウンスペース WAKWAK では、「ひとりぼっちのいないまち（社会的包摂）」の実現のため、「富田エリア事業（ローカリティ）」と「中間支援事業（インターメディアリー）」の 2 つの柱で事業を展開しています。

1 富田エリア事業（ローカリティ）



高槻市富田地区を対象エリアに多様な団体のプラットフォームの役割を担いながら子どもから高齢者までを対象とした官民、多セクター連携による「切れ目のない支援」の構築をめざし多岐にわたる事業を行っています。

2 中間支援事業（インターメディアリー）



高槻市域全域を対象に広く多様な団体や人たちの協働によるネットワーク化を通じて、「中間支援」としての活動を行っています。

3 視察受け入れ／講師派遣事業

4 調査・研究開発事業

5 その他事業

地域・家庭・学校・行政・大学・企業などと協力しながら

ひとりぼっちのいないまちをつくる!

1 地域との協働 まちづくりに住民の力を活かす

事業を支える住民のボランティア

子どもの居場所づくり事業をはじめ当法人の事業は多様な住民のボランティアによって支えられています。

こども食堂での地元校区民生委員児童委員中川さん親子による調理、わくわく食堂では、普段高齢者会食サービスのボランティアをされているボランティアサークル「ひまわり」の皆さんによる調理、元富田保育所の保育士さんによる「よちよちコーナー」、善太鼓の演奏、手話サークルトライアングルの皆さんによる手話うた、風の子文庫による絵本の読み聞かせや子どもの居場所、地元老人会による高齢者みまもり活動などなど。地縁組織ならではの、たくさんの住民の皆さんに支えられて事業の運営を行っています。



2 大学との協働 まちづくりに大学生の力を活かす

学校教員や保育士、福祉職を目指す 大学生や大学院生の力

これまで連携をいただいている平安女学院大学、大阪人間科学大学、関西大学に加え、新たに大阪大学との連携を図っています。



一つは「共創知」を生み出す場をテーマに産官社学連携による仕組「OOS(大阪大学オムニサイト)」の協定を2019年9月20日に締結しました。



もう一つは「未来共生イノベーター博士課程プログラム」の一環として大学院生が地方公共団体やNPOなどに出向き実践から学ぶ「公共サービスラーニング」の実習先となり、2019年10月からインターン生の受け入れがスタートしました。



子どもの居場所づくり事業には、将来学校教員や保育士、福祉職を目指す学生さんなどたくさんの大学生や大学院生がかかわってくれています。

様々な子どもたちと学生の時に関わり、そこで学んだことを現場に巣立った時に活かしてもらえたらと願っています。



3 地元学校園 「ゆめみらい学園」 との協働

「いまとみらい」

「いまとみらい」をテーマに総合的な学習の時間を通じて社会参画力の育成を図っている高槻市立富田小学校・赤大路小学校、第四中学校、富田認定子ども園の園児・児童・生徒が共生食堂「富田わくわく食堂」をはじめ多様な事業に携わって頂いています。



【ほっと Station 富田】

2018年、高槻市立富田小学校5年生の総合的な学習の時間の取り組みで、子どもたちが大阪北部地震による災害支援から学んだことを冊子化し、チャリティグッズとして制作。わくわく食堂に



において取り組みの発表とともに冊子のお披露目をしていただきました。

「社会の温度計をあげよう」

2019年、「レガシー」をテーマに高槻市立第四中学校3年生が地域の方々へこれまでの感謝を伝えるというテーマにてわくわく食堂の看板を作成し、届けてくれました。



2024年「社会の温度計をあげよう」をテーマに高槻市立赤大路小学校・富田小学校6年生有志による有志が100万人のクラシックライブとコラボ。



4 企業との協働

「SDGs」パートナーシップの実践

企業からの支援

この間、わくわく食堂へサンスター（株）による歯ブラシのご提供、TOA(株)や大阪ガス(株)によるワークショップ開催、ふーどばんく OSAKA やダイエーフードドライブ、丸大食品(株)、コニカミノルタ(株)による食品のご提供をいただいています。企業様のご支援に改めて感謝申し上げます。



市域全域を対象とした食支援の取り組み

市域全域を対象とした食支援の取り組みでは、(株)ミートモリタ屋、(株)彩、(株)甲和ビルド、テニスガーデン高槻、(株)宮田運輸からご支援をいただいております。

「SDGs トレイン 未来のゆめ・まち号」

子どもの居場所づくり事業は2018年度より阪急阪神ホールディングスグループ(株)が行う「阪急阪神 未来のゆめ・まち基金」より助成を受け実施。

同グループが阪急阪神 未来のゆめ・まちプロジェクト10周年を記念して「SDGs トレイン 未来のゆめ・まち号」を運行。



同グループや国・沿線自治体・協賛企業・市民団体のSDGsの取り組みについて車両ラッピングや車内ポスターで情報発信を行う中で当法人の取り組みについてもご紹介いただきました。



トピックス -1

マスメディアでの紹介



**「ただいま～と言える子どもたちの居場所づくり」が
NHK 総合TV「課題解決ドキュメント」で
全国放映されました！**

1

**「子どもたちが安心して元気になれる居場所づくり」を
NHK 全国放送局が取材放映**

2017年の2月から4月まで約3カ月にわたって取材
いただいていた「ただいま～と言える子どもたちの居
場所づくり」が4月30日(日)午前10時5分～48分に
NHK「地域魅力化ドキュメント ふるさとグングン!」
として放映されました。



2

滋賀県の先進的な取り組みからも学ぶ

取材にあたっては、NPO法人子どもソーシャルワークセン
ター代表の幸重忠孝さんに事業立ち上げから関わっていただ
き、滋賀県大津市・米原市での先進的取り組みの見学もさせて
いただきました。

3

番組取材には多くのみなさんの協力が

スタジオ進行は幸重忠孝さん、俳優の風間トオルさん、ぺこ&りゅーちえるさん。番組では、孤食・不登
校・いじめ・貧困…ひとりぼっちの子どもたちが安心して元気になれる居場所を地域につくりたいという住
民の取り組みを通じて、富田小学校、第四中学校の生徒さん、子ども食堂に関わったみなさん、学習支援教
室に通う子どもたちも登場しました。

4 「ひとりぼっちのいない町」 Part2

2017年に引き続き、12月から3月の約4カ月にわたって取材いただいていた「ただいま～と言える子どもたちの居場所づくり」の第2弾が2018年4月22日(日)午前10時5分～48分にNHK「課題解決ドキュメント ふるさとグングン!」として放映されました。スタジオ進行は幸重忠孝さん、関ジャニ∞の横山裕さん、ぺこ&りゅーちえるさん。



5 中学生が主人公となった取り組み



2017年は、富田地区の「ただいま～と言える子どもの居場所づくり」として、地域主体の動きを放映いただきました。

2018年は、その第2弾。高槻市立第四中学校の中学生がこどものひとりぼっちの課題を考える授業として地域のさまざまな場に参画する様子とそれを支える地域の大人の姿を放映いただきました。

6 地域・家庭・学校・行政・企業・大学・NPO など 30 を超える団体の皆様のご協力を

2018年放映において当法人はただいま食堂や実践報告会の主催、さらなる子どもの居場所づくりの動きや中学生が主人公となってまちの課題解決を行う際に地域内外の30を超える多職種さまざまな組織を微力ながらコーディネートさせて頂きました。



番組は NHK 地域アーカイブズのホームページからもご覧いただけます。

トピックス -2

政府（内閣府）広報において放映されました！

政府（内閣府）広報番組「子どもたちの未来のために」
～地域に根さす支援の現場～



1 多セクター協働による包括支援

内閣府からご依頼をいただき、2021年7月に当法人の子どもの居場所づくり事業の一つである「学習支援事業わんぴーす」および「フードパントリー」等についてテレビ朝日映像株式会社に取材いただきました。その様子が内閣府特番としてこの度、放映されました。

2 子どもたちの未来のために

コロナ禍で孤立が進む今。子どもたちの暮らしと学びを支える草の根活動が全国に広がっていると言います。そこで、つるの剛士がその支援の現場を訪ねます。

東京都豊島区『いけいけ子ども食堂』の活動と人々の想いを取材。また、板橋区『地域リビング プラスワン』で行われているのは、『おうちごはん』という取り組み。さらに「学び」に対する活動について探るため、大阪府高槻市富田町の『コミュニティースペースNikoNiko』へ。子どもたちを支える活動を通し、日本の未来を見つめます。



(番組公式ホームページより)

3 子どもたちを支える包括支援

取材では、タレントのつるの剛士さんが富田地区に来られ、地域に根ざす支援の現場として行政、大学、学校、企業、民間の連携による子どもたちの包括支援をテーマに取材いただきました。



トピックス-3

NHK Eテレバリバラ「水平社100年」に出演しました！



全国水平社創立100周年に合わせ制作されたNHK Eテレバリバラ「水平社100年」が2022年3月3日、10日に放映され、当法人事務局長が出演しました。

- 水平社宣言100年①
「人間は尊敬すべきものだ」
- 水平社宣言100年②

1 「このまちに生まれてよかった」 そう思えるまち

今回の出演では、まちづくりを通していかにして部落差別をはじめ様々な社会課題を解決し次世代の子ども達に「このまちって素敵」「ここに生まれてよかった」と思えるまちをつくってゆけるのか（展望）を短い時間ながらも語りました。

2 「人の世に熱あれ 人間に光あれ」

「過酷な部落差別があたりまえだった100年前に誕生した水平社宣言。人間は同情や哀れみの対象ではなく、尊敬すべき存在だと訴えた宣言の理念は、いまでも輝きを失っていない。番組では水平社誕生の歴史を通して、宣言の意義を考える。スタジオには被差別部落出身者など当事者が大集合。当事者が声をあげる意義・支えることの大切さ、「自分を好きになること」など、理不尽な壁にぶつかっているすべての人たちに熱と光を届ける！」（番組ホームページより）

○番組公式HP

<https://www.nhk.jp/p/baribara/ts/8Q416M6Q79/episode/te/KNX4361X2K/>

トピックス-4

NHK かんさい熱視線 /NHK 青森あっぷるワイドにて放映

当法人が高槻市から受託している「高槻市子どもみまもり・つながり訪問事業」が2023年7月1日（金）の午後7時半からのNHK「かんさい熱視線」で放映されました。

「検証・神戸6歳児男児遺棄事件 なぜ命を救えなかったのか」のタイトルで前半は神戸市西区の男児虐待死事件を掘り下げ。

神戸市子ども家庭局への取材のほか、「過去の教訓から虐待を見逃さない体制強化」に取り組んだ千葉県野田市での取り組み紹介に続き、「全戸訪問で事前にリスク把握に努める」高槻市の「子どもみまもり・つながり訪問事業」をご紹介します。

また、2024年3月にはNHK「青森あっぷるワイド」で「未就園児の虐待を防ぐには」をテーマに同事業を取材・放映いただきました。



トピックス-5

全国に発信し他地域の課題解決の一助に

私たちが願っているのはこの地域でつくる支援の仕組みが他地域の課題解決の一助になることです。この間、様々な場面でのご紹介をはじめ光栄な賞などをいただいています。これらを通じて微力ながら全国に発信を行っていきたいと考えています。

1

日本地域福祉学会「地域福祉優秀実践賞」を受賞

この度、タウンスペースWAKWAKが光栄にも日本地域福祉学会が行われている「地域福祉優秀実践賞」を受賞させていただきました。

この賞は2004年度に地域福祉の優れた実践を顕彰するために設置された賞で今回で第21回目となります。日ごろ大変お世話になっている加納恵子先生（関西大学）よりご推薦いただき受賞する運びとなりました。

今年度6月に開催される日本地域福祉学会第38回大会（東京大会）の授賞式に出席させていただき、その後報告会にて実践報告させていただきます。

このような光栄な賞をいただき感謝申し上げます



2 関西大学人権問題研究室紀要論文に実践を掲載

これまでの富田地区および高槻市域の実践について、「高槻市富田地区包摂型のまちづくり-子どもの居場所づくり事業を中心に」、コミュニティ再生事業の取り組みは、「多セクターとの共創による包摂型コミュニティ生成」、市域全域を対象とした取り組みは「居場所の包括連携によるモデル地域づくりに向けたアクションリサーチ」としてそれぞれまとめています。インターネットでもご覧いただけますのでぜひご覧ください。



3 『子どもと家庭を包み込む地域づくり』 発刊

京都女子大学の谷川至孝先生、岩槻知也先生からお声がけいただき、それぞれ大津「子どもソーシャルワークセンター」理事長幸重忠孝さんや京都「山科醍醐子どもの広場」代表理事村井拓哉さん、「沖縄ももやま子ども食堂」理事長鈴木友一郎さんなどとともにタウンスペースWAKWAKにおける富田地区の子どもの居場所づくりについて執筆させていただきました。

『子どもと家庭を包み込む地域づくり-教育と福祉のホリスティック



4 『ひとりぼっちのいない町をつくる』 発刊

富田地区及び高槻市域全域を対象とした取り組みを実践書としてまとめ明石書店から出版しました。

監修には志水宏吉（日本教育社会学会会長）、コラムとして学識者のもとより地域関係者、学校関係者、NPO関係者などさまざまな方々から寄稿いただいております。

『ひとりぼっちのいない町を作る-貧困・教育格差に取り組む大阪・高槻富田の実践に学ぶ』明石書店



5 多セクターとの共創の活動に対し 大阪大学大学院「独創的教育研究活動賞」を2度にわたり受賞

2020年は、多セクターとの共創による「コミュニティ再生事業」の取り組みが大阪大学国際共創大学院による「独創的教育研究活動賞」（「多セクターとの共創による新たな多文化コミュニティづくりによる共創知の生成」）を受賞。

2021年は高槻市域の取り組みに対し、「多セクターの共創による社会的不利を抱える家庭の要支援状況の可視化によるソーシャルアクション」を受賞しました。

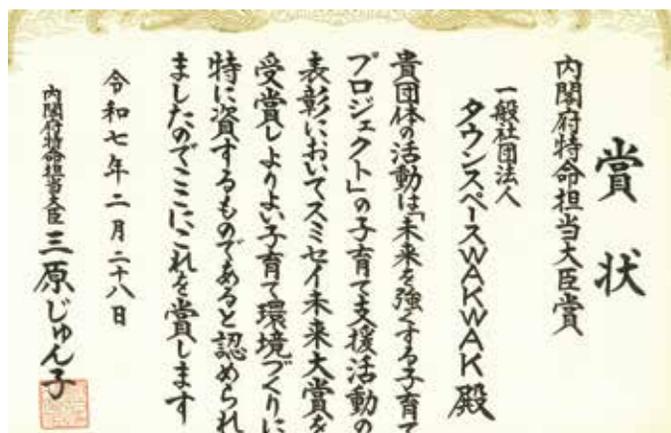


6 スミセイ子育て支援表彰「内閣府特命担当大臣賞」受賞

2025年2月28日、東京国際フォーラム会館で開催された住友生命さまの子育て支援活動表彰式において栄えある大賞・内閣府特命担当大臣賞を受賞させていただきました。選考委員のみなさまからは「自分達独自の活動に加えて、まちづくりや地域全体の生活支援など幅広く取りくんでいる点やネットワーク形成を高く評価させて頂いた」との過分なコメントも頂き、三原順子・内閣府（子ども政策等）特命担当大臣名の表彰状、住友生命さまより盾を贈呈頂きました。



3月9日にはそのご報告に高槻市長に表敬訪問をさせて頂きました。



7 国会議員によるオンライン視察・ヒアリングをお受けしました

2022年2月9日(水)午後5時15分より超党派の国会議員で構成されている「休眠預金等活用推進銀連盟（会長：加藤勝信衆議院議員/前官房長官）」による視察・ヒアリングを受けさせていただきました。

視察・ヒアリングは衆議院議員会館会議室とZOOMをつないでのオンライン形式。視察・ヒアリングを受けさせていただいたのは、タウンスペースWAKWAKを含む関西エリア6団体です。

ヒアリングでは各団体から助成事業についての概要説明の後、出席国会議員からの質疑応答形式が進められ、議員連盟からは約30名の衆参国会議員が参加いただきました。



8 厚生労働省・子ども家庭庁を通じた実践報告

2023年5月18日（木）は、認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえさんからご依頼をいただき、厚労省・子ども家庭庁の方々へ高槻市における「厚労省ひとり親等の子どもの食事等支援事業」の実践について報告。

2025年3月5日（水）は、同じくむすびえさん主催の「こども家庭庁支援対象児童等見守り強化事業・オンラインセミナー」に登壇。全国の市町村や社協さんなど約200名ほどのの方々にご参加。

この間、高槻市における官民連携による包摂ネットワークの構築について報告いただく機会をたくさんいただいております。市町村レベルで好事例を生み出し全国へ積極的に発信したいと思っております。



支援の呼びかけ 寄付の方法

ご寄付のお願い
活動へのご支援を
お願いいたします。

WAKWAK サポーターになる / 活動を応援する

今社会的に不利を抱えている人だけでなく、そうではない人も子どもから高齢者まで、誰もとりこぼさない地域が必要です。わたしたちは、富田での切れ目のない支援を目指したまちづくりと、高槻市域全体により多くの支援を届ける中間支援としての取り組みの2つのベクトルでさまざまな人たちとこの社会課題に向き合っています。この取り組みは富田をモデルに、高槻市全域、さらに全国へ広がります。

そんな「ひとりぼっちのいないまちづくり」を持続可能なものにするためにWAKWAKサポーターとして一緒に取り組みを応援してください。

サポーター制度の他、さまざまな応援方法をご用意しています。すべての応援についてご登録いただいた方には、年に2～3回発行しているWAKWAK通信等を送付し、活動内容をご報告させていただきます。

WAKWAK サポーターとして仲間になる！

WAKWAK サポーター（毎月）1,000 円～ / 月

WAKWAK サポーター（毎年）3,000 円～ / 年

支払い方法は、カード各種/Apple Pay/Google Payに対応しています。

※ 株式会社コングラントの寄付プラットフォームを利用しています。

▶お申込み方法：QRコードを読み込むと寄付決済ページが表示されます。

「寄付をする」をクリックするとご希望の金額から簡単に寄付することができます。



あなたのご寄付でできること

タウンスペースWAKWAKの事業はみなさまのあたたかいご寄付で支えられています。 ※下記は概算です。

富田エリア事業なら

3,000 円で



子どもの居場所
1回の運営の支援
ができます

5,000 円で



困窮家庭の緊急食
糧支援1世帯分の
支援ができます

10,000 円で



学びの支援受講生
1人1ヶ月分の受講
ができます

中間支援事業なら

10,000 円で



地域から広がる第三
の居場所アクション
ネットワーク会議を開
催できます

50,000 円で



緊急性の高い地域
へ1ヶ月分の食支
援ができます

100,000 円で



市内4か所の子ども
食堂等へ1回分の
デザートを提供で
きます

そのほか、さまざまな応援方法

01 「今を支える」寄付をする！

・タウンスペースWAKWAKへの応援 1,000円～

▶お申し込み方法

■クレジットカードの場合

支払い方法は、カード各種/Apple Pay/Google Payに対応しています。

※ 株式会社コングラントの寄付プラットフォームを利用しています。



QRコードを読み込むと寄付決済ページが表示されます。

「寄付をする」をクリックするとご希望の金額から簡単に寄付することができます。

■銀行振込の場合

下記の口座までお願いいたします。

銀行名 北おおさか信用金庫 富田支店

種別 普通口座

口座番号 0554063

名義人 一般社団法人タウンスペースWAKWAK 代表理事 岡本茂

お振り込み後、お手数ですが、①住所 ②お名前 ③活動報告送付のご希望 ④領収書のご希望を下記のメールアドレスまでご連絡ください。

■WAKWAK事務所へ直接の場合

タウンスペースWAKWAKへご持参ください。

〒569-0814 大阪府高槻市富田町2丁目13-8 ハイツ白菊1F

02 ボランティアとして活動に参加する！

参加を希望する活動や、参加しようと思った理由とともに以下のメールアドレスまでご連絡ください。

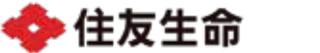
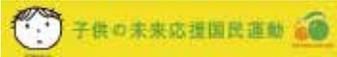
03 食材や備品の寄付をする！

社会貢献活動として支援を届けたいと検討されている法人・企業のみなさま、活動に使えるような物品の支援を検討されるみなさまは以下のメールアドレスまでご連絡ください。

メールアドレス info@ts-wakwak.com

支えてくださった企業・団体 / 個人のみなさま

●企業・団体寄付（敬称略・順不同）

 <p>サンスター株式会社</p>	 <p>丸大食品株式会社</p>	 <p>株式会社ミートモリタ屋</p>
 <p>株式会社宮田運輸</p>	<p>イオンフードスタイル</p>	 <p>ジャトー株式会社</p>
 <p>大阪ガス株式会社</p>	<p>あなたの未来を強くする</p>  <p>住友生命株式会社</p>	 <p>TOA株式会社</p>
 <p>アサヒ飲料株式会社</p>	<p>フードバンク大阪</p>	 <p>阪急阪神 未来のゆめ・まちプロジェクト</p>
 <p>子供の未来応援基金</p>	 <p>WAM (社会福祉振興助成事業)</p>	 <p>一般財団法人 日本民間公益活動連携機構 (JANPIA)</p>

 <p>全国こども食堂支援センター・むすびえ</p>	 <p>ビューファイナンス</p>	 <p>日本財団</p>
 <p>こども夢基金</p>	 <p>大阪コミュニティ財団</p>	 <p>熊西地域振興財団</p>
 <p>赤い羽根共同募金</p>	 <p>大和証券財団</p>	 <p>楽天未来のつばさ</p>
 <p>大阪商工信用金庫</p>	 <p>太陽生命厚生財団</p>	 <p>大阪府人権協会</p>
 <p>部落解放人権研究所</p>	 <p>高槻市</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●個人として寄付をくださったみなさま ●正会員・賛助会員のみなさま ●WAKWAKサポーターのみなさま（月・年） ●活動を支えてくださった関係者のみなさま

代表理事メッセージ

ひと・くらしを中心にすえたまちづくりの要とし



代表理事 岡本 茂

2012年4月にタウンスペースWAKWAKが一般社団法人として設立され早くも12年が経過しました。

設立趣旨でかかげた「すべての人に居場所と出番がある社会」「すべての人がSOSを発信でき、互いに支えられる社会」というミッションは、「ひとりぼっちのいないまちをつくる」という言葉に集約され、子どもから高齢者まで切れ目ない支援を目標に事業を展開しています。言い換えれば誰も排除しない「社会的包摂のまちづくり」です。

2021年度からはこれまでの富田地域事業に加え、新たな市域広域事業にもチャレンジしてきました。現在は、高槻市富田地区をエリアに多様な団体のプラットフォームの役割を担う「富田エリア事業」と「地域から広がる第三の居場所アクションネットワーク」をはじめとする高槻市域全域、大阪府域協働による「中間支援事業」の両輪での活動を進めています。

新たな取り組みとしてはコミュニティスペースNikoNikoを活用した「子どもの居場所づくり事業」や阪大生の持ち込み企画「わくわくワールド」、新型コロナ禍における物価高騰を背景とした「生活応援緊急食料支援」、また富寿栄住宅建替えに伴う新たな自治会設立、認定NPO法人全国子ども食堂支援センターむすびえの「むすびえ・こども食堂基金2023年度」を活用した「わくわく基金」の創設などがありました。

社会の変化に対応し今必要な人に必要な支援を届けるのは「民」であるからこそできる強みでもあります。反面、常に組織や財政基盤の確立に奔走する日々でもあります。

国が提唱する地域共生社会実現に向けた重層的支援体制構築「制度・分野ごとの『縦割り』や『支え手』『受け手』という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が『我が事』として参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えて『丸ごと』つながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会」モデルはまさにAKWAKの事業そのものです。

「ひと・くらしを中心に据えたまちづくり」と「地域課題の解決を目指すまちづくり」相互のアプローチの要となるのがWAKWAKの組織・団体としての立ち位置ともいえます

この間、タウンスペースWAKWAKも多くの民間助成団体・市民団体、地域・学校・企業等多セクターのみなさんおよび多くの個人の方に支えていただいて今日に至っています。

こうした支援はWAKWAKの事業評価の指標であるともいえます。SDGsの理念でもある「ひとりも取り残さない」地域社会実現へみなさまの引きつづくご支援をお願い申し上げます。

あとがき

-地域に“つながり”の橋をかける-

「こうしてこれからきれいな施設をつくっていくことは大切なことだと思いますよ。ただ、どれだけきれいな箱モノをつくっても地域の人たちの中にある長年の“意識”を超えないと本当の意味でのつながりなんて生まれません。」

これは高槻市長の3期目の施政方針の重点課題の一つとして掲げられた「副都心富田地区のまちづくり」の一環としてある施設づくりに向けたワークショップがあり、その場に参加した際、ある方が問題提起された言葉。これから富田地区のハード面が大きく変わっていく中で、ソフト面（心の部分）へと、これまでもそうだったように絶え間なく、そして、根気強く働きかけをしていくことの大切さをあらためて教わった言葉だった。

そんな中で新型コロナ禍4年間延期していた、地域に住む多世代、子どもから高齢者、障がい者、多様な人たちがごちゃまぜに交流する拠点としての「富田わくわく食堂」を復活することを決めた。

様々な方々の力をお借りしてこの企画を実現化しようとしたのにはクラシックライブなどの文化を通して「地域に“つながり”の橋をかける」という願いがあった。

冒頭にある方がおっしゃった“意識”とは、長年地域の中にある差別意識。見えにくくはなってきたけれど、残念ながら差別意識は根強くある。それが表面化したのが数年前の施設型小中一貫校施策を進める中で起こった差別事象だった。そうした時、差別を止めていく行為も大切。一方で大切だと思うのは、いかに“豊かな出会いを生み出していけるのか”ということ。この取り組みの前身となる北部地震後に立ち上げた「未来にわたり住み続けたい町」の取り組みで願ってきたことも「ここに生まれてよかった。」「こっってステキなまち」と思える町を描くこと。まちで様々な人たちが「ごちゃまぜ」になって豊かな出会いをしていくこと、そのことを通して結果として差別がなくなっている状態をめざすこと。

この地域では、一貫して地域・家庭・学校・行政・大学・企業等様々な方々の力をお貸りしながら「ひとりばっちのいないまち」をめざしてきた。それは、社会的包摂をめざすまちの姿であり、さらに先には「新しい多文化共生社会」を描いている。その実現化にはまだまだ道は始まったばかり。

当事業は、WAM助成（社会福祉振興助成事業）を受けて実施することができた。また、ここで行った多岐にわたる事業は当法人だけではできないものではなく、地元の老人会や自治会、民生委員、高齢者配食グループ元ひまわりさん、ベテラン保育士さん、文庫主宰者さん、大阪大学をはじめとする学生や留学生の皆さんなど、ここに書ききれないほどの様々なまちの「担い手」の方々のお力があってこそその取り組み。さらにプロジェクトの座長を引き受けてくださった大阪大学教授志水宏吉先生、高田一宏先生をはじめ学識者のみなさま、弁護士の森本志磨子さん、取り組みに協働してくださった高槻市立第四中学校校区の校長先生はじめ先生方、認定こども園の先生方、高槻市の行政の皆様、いつも素敵なイラストと装丁をしてくださっている村越好恵さんのご協力により作成することができた。この取り組みに関係してくださったすべての関係者の皆様に感謝申し上げます。

事業を通じて当法人が微力ながら行っている実践は長年まちづくりを行ってくださった多くの方々からの「過去からのギフト」を「次の世代を生きる子どもたちへのギフト」として大切に手渡していくような営みだと考えています。

本作があなたにとってのギフトとなることも願っています。

2025年3月31日

一般社団法人タウンスペース WAKWAK
業務執行理事兼事務局長 岡本工介

WAKWAK ができるまで

- 新しい福祉のまちづくり「受ける福祉から担う福祉・共に創る福祉」-

- 1994. 6 「子ども・女性・高齢者・障がい者の人権ネットワーク」を設立
- 2001. 2 高槻富田地域で「新しい福祉のまちづくりプロジェクト」の結成
(障がい者施設づくり、高齢者・障がい者生きがい事業団、住民参加・在宅サービスの各プロジェクトのたちあげ)
- 2001. 9 社会福祉法人つながり設立準備会結成
(1700万円を目標に施設賛同基金に取り組み、住民参加の施設づくりのためのワークショップを計10回開催)
- 2003. 4 高槻富田地域に知的障がい者通所支援施設「サニースポット」(定員50名)が開設

- 地域の再生とまちづくりへの新たな歩み -

- 2006. 6 富田まち・くらしづくりネットワーク結成
(地域一斉清掃・祭り・盆踊りの復活によるコミュニティの再生、富寿栄連合自治会・老人会の再建、富田共同浴場ひかり湯のコミュニティ活用)

- 新たな福祉と人権・協働のまちづくり事業構想に着手 -

- 2010. 9 タウンスペース WAKWAK 事務所開設
- 2011. 12 法人取得へ設立準備会
- 2012. 2 設立総会と一般社団法人認証取得
- 2012. 3 一般社団法人タウンスペース WAKWAK 設立記念シンポジウム開催
- 2012. 4 新たな福祉と人権・協働のまちづくり事業がスタート

WAKWAK の事業展開

- 新たな福祉と協働のまちづくり事業 -

- 2012. 4 障がいのあるないの垣根を超えるボーダレスアート事業開始
地域福祉ランドデザイン事業スタート
- 2014 学習支援わんぴーすのスタート

- 社会的企業としての包摂型のまちづくり事業 -

- 2017. 1 事務局強化(新事務局長)と社会的企業として包摂型のまちづくりのスタート
- 2017. 4 「ただいま～と言える子どもの居場所づくり事業」(わくわく食堂・ただいま食堂)スタート
「社会的養護の子どもたちのバックアップ事業」前身の取り組みの引き継ぎとしてスタート
- 2018. 5 行政の受託に頼らない社会的企業の仕組の確立

- 法人役員体制の強化と新理事(学識経験者)の就任 -

- 2018. 6 大阪北部地震の発災と災害支援の取り組み
- 2019. 7 未来にわたり住み続けたい町「コミュニティ再生事業」の本格着手スタート
- 2021. 6 居場所の包括連携によるモデルづくり事業(全国)スタート

- 事業体と中間支援の両輪 -

- 2024. 4 富田エリア(ローカル)、市域エリア(インターメディアリー)の両輪での活動本格スタート

制作：一般社団法人タウンスペース WAKWAK

デザイン・装丁：MURAKOSHI

本事業は WAM 助成（社会福祉振興助成事業）を受けて実施しています。

価格 500 円

この収益はすべて当事業の支援活動へと大切にに使わせていただきます。



WAM助成

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業